

自娛小錄

四

昭和六年七月下浣起筆

特別
14
1919
433



自娛小録

昭和六年七月下浣起筆



〇大正十年^{七月}宮内省圖書寮に於て五回に亘り下橋敷長
 を招き准形前の宮庭に因りて談話を請ひ是を
 速記して印刷せしむるの今の如き稀覯のものあり
 漸やく主入る下橋氏は皇元七十八年を以て歸る朝
 廷の典例に違ひ記略に確かな也此人一條捕政家の侍
 〇二十二年の時回家の御側席に仕へ其後世系未
 百具方を勤め其後三年八月祖父陸奥守敬義
 の跡を継承し明治維新後父山御成主殿宗
 出法名に勤勤するものあり、幕末朝廷の事

此のえも物一く且の磁室まうまのあしは、九重奥
深くをききのたひかり得さること傳此方な伝るに
り且のあまのい感するこの少うか、閑と任せを隨後
脚か、トをえのこと左の女一

一 主上御早御のり、のゆまに朝お身仕方の内
二 鐵將水を附けね、すことあり、こんの毎
日、あうこんも、惟祈りし、まむ此の習儀
お儀さん、と見え

一 朝衣を差よる時、例とせんおあさにと
祈するし、を三錢にて、成りつて、御膳に添く
ふ、こんの國子の如き、小形の餅を、塩餡
つけあり、数の六個、ころん、足利時代

朝廷御田、御田、窮の次、京都の川端
道善が、其條を、知事するを、業を、一、比のむ
毎朝、おふ、料、を、献、したることあり、ま
を、記念する、為め、永く、御膳、に、添、くること
と、う、ま、ま、あ、る、主上、に、御、儀、な、る、ま、ま、む、
目、著、い、お、つ、け、あ、る、ま、ぬ、と、い、ひ、ら、る。尚、ほ、京
都、に、立、入、宗、徳、と、い、ふ、ま、の、か、あ、り、て、久、し、い、百
粥、を、朝、廷、に、献上、し、比、と、ま、ま、か、は、皆、式、微、の
頃、を、傳、う、こと、む、あ、る。

一 守内儀の、御、せ、官、の、ゆ、ま、命、婦、と、い、ふ、か、地、下
の、娘、か、ら、出、つ、つ、ら、が、ま、ん、ま、七、正、三、位、の、家、の
娘、に、な、る、け、ん、い、ま、ま、ぬ、と、い、う、こと、あ、る。命、婦、の

内々御差しと云ふのがあつて、ごんが主上の
 お手次の時はお供へ行く、例にお出の
 時を危中へえんが平燭をとげし先
 主のお供をすも、大儀に依り主れせらる
 ことおとらう(東司)と云ふてある、此命
 ぬるの主上のお手がかつ、併しぬること
 と命ぬが天子がおをおつーやつても直様
 の直様申上げることかろぬ、ゆゑは
 其侍内侍を以つて申上げる元々、殊
 差れけい、ゆゑ(申申上げることか出来
 る。他の命ぬと親を申が申つて、主上へ
 直してあるから、**特別**ゆゑ)差



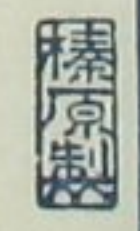
をすること、大許さんてあると云ふ。

一 命ぬの下に御末と云ふかある、この大膳職
 の外に存つて主上の口上り物を世に、ごんが
 するべく上へや、此の御記の内へ主
 上のかうをうすく御記と云ふか
 らてあるか、主上も御記もこれと好ませら
 ること、御記に京都へ候ふ事のこと、此と
 御記に、

一 皇子皇女は七親王宣下するも、まむいあるの
 跡、御記よりか、おのち直らせらる、何れ死を
 するも、喪と申すことか出来らる、
 つた、まむい皇子皇女は、此の三つ名のお給

かつく、御孫の子をうむとせらむと、其の三石
がまんが附いてさくる。典侍内侍から生んらん
に皇子皇女の元服の異つて、御孫の子ころら
んまると親王宣下があることすべ、左も右けん
はお贈ひの五石を、親王宣下とすうて始
めて三石をころら、此の側腹の皇子皇女
か本侍お部内位の御にお隠んまると、恐
れ入の比まかお局々人の家く尊厳をも
引返し、御孫及び七御皇の寺に言ふ
ことさうしてゐて極めて物々家のよめであ
る

一 五親家から朝賀の節例として太刀二腰



馬二匹(馬の代銀)太刀の木をむか
全き形式のものむかふた、朝廷(きり)
礼として馬代に折紙をかゝりて其傍にお
返しするも、太刀の其傍に返しする
か返してさくるか、差引の何れも
いふ大名を、献するも、比けは十枚献
すも、一枚の返(礼)にせいで九枚の付
ハ御得合はるる

一 御一新、うりての次、五年の次、御不を云
拂ひて素畑に仕うるとして、御不の價が
五千四二文、城が七文、御不の
買手かき、御不の本、乾寺の買人と

これが岩倉公の御不を考へた詔を改定し
んいふぬと云ふんれのか沙汰止と云ふ
と云ふてある

一 儀礼の文字の上はわいふくやうにういことが
あつて、様の方が殿も、尊最一あきし
と云ふてある、攝家や名家大臣は、様と書
かふけんは、さうするころに。

一 係し徳川御申の威張つは、このい公方様よ
り有極の極くと書つてあつた、天子
様を後、書つて来さす、公方様をい
后、攝家五斬と書つて、公方様を上
へ書つて有極の極と下の方へ書つてあ



この攝家くしさうびす、天子様は、日暮に
あつてある。

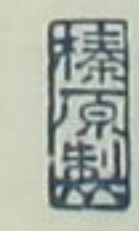
一 勅使と将官との合ふ見、この御申の上
あり、勅使が下あり、平伏す、徳川の
内大臣御次大將軍に任すと云ふ、御勅
を武家侍奉が持つて江戸へ下つた、御
将官の上あり、この交けつといふ、誠
あるのりさういふつた。

一 七日の御儀式の内、裁制始の儀式がある
この検派遣使北陸と云ふ、一夜作り
の儀不、二十四人は、形は、裁制を
せり首と斬の真似をする、さういふ

ふらつくりおかしきものあり

一日に始めて坊さん達か是れが冬か春か冬か春か
とて就て紫宸殿か全く佛壇と成り化
し一連の修治法を行ふことが例であ
る。此の真意の考をばある

一 位階の位がくやうさうかつた時であるからよい
位を得たといふ位階の位名無記のういひか六位以下
の位名は甚しく下りて、七位も無位無官の位
が算り下りしと思ふ所が、八位も下りて
るに別してさういふか、下りて位階も小の位を
さういふ位もさういふ位、例を云ふつて云ふ
の同様の家の史書と云ふものいひはるらん



家のものむす唯ね位か、一の大和太掾の
一の位階未か着る位といふか、金を懸く
らん、その位階も、位階も、位階も、位階も、
身つくと、位階の位階も、位階も、位階も、
位階も、位階の位階も、位階も、位階も、
位階も、位階の位階も、位階も、位階も、
位階も、位階の位階も、位階も、位階も、

一時官仕へのもの、并南を下さつた、
ハ、位階も、位階も、位階も、位階も、
位階も、位階も、位階も、位階も、
位階も、位階も、位階も、位階も、
位階も、位階も、位階も、位階も、
位階も、位階も、位階も、位階も、
位階も、位階も、位階も、位階も、
位階も、位階も、位階も、位階も、

わが家ひ作つて見れば、申七口より得るころに
と云ふ。何んぞと云ふ。今日の教員、海より
たこと、此市のものである。

一 孝の天皇の晩節：御禮お酒をめでし
上つたを、いつ七晩の御礼、十時迄はあ
つたと云ふ。

一 今ひ、吾校の太子様のお徳き、今より天
子様、次々尊敬申上りて居るが、七といふ
攝家の権威か、いづく高のよき、こんど
差相が、あつても、どんと云ふこと、さうも
かゝるの、大いなる恐怖しぬ。膜を
運ぶ公家達、七五攝家、かく此様の時



ハ、此市、精神を、身寄りに、玉女の後、
申つた人の、皆、臨命に、さういふ、云つた、さうい
ふ、人、さういふ、あ、の、礼服を、着け、
如く、いふ、三寶を、おろ、運ぶ、の、に、か、ら、
分、隔、さ、さ、う、つ、つ、れ、び、あ、ら、う。

一 今ひ、天子一代、難い、あるが、昔、い、改元、は、
い、と、あ、の、に、あ、つ、た、か、さ、ん、の、改元、甲子、辛
酉、の、目、出、度、い、年、と、云、ふ、の、改元、こ、ん
が、重大、な、こと、ある、の、で、あ、ら、か、い、ん
年、號、を、由、定、して、さ、ん、を、徳、可、何、年、
の、改元、を、改、ふ、に、さ、ん、を、男、表、さ、る
前、に、冬、後、の、公、卿、が、お、寄、つ、て、年、號、の

文字に就て是れは討論す、例へば文
久と内容にてあるものを討論せしむる
もの討論に就ては格別の格を成す
の議論と執るたしむるものあり。志
かしくも形式は、結局は内容ありとす
このは、明治大正の年號も早く
時より年號候補を撰んじ時のよ
をあるか採用せんとのことす

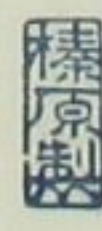
一 徳川氏の金銀に等しい御料は十萬石が
あるがその内三萬二十一石六斗が天子
様のものあり、あとい五攝家その他に分配
せん。天子様の分はけは、元禄年より

の格より変更は、まのいが、他の年を據る
格減がある。近衛さん、二千八百石を
あつて、池田伊丹とよふ所のあり
から、山味一萬石から上ふ、九條は三千
石、一ヶヶけんも、山味二千石、上りまて
ん

一 徳川氏からの献上物は、奏者番の年を
ふか、近衛公の御料とすつてあるもの
奏者番が献上物の内を、或個が振く
ことある例へば、西爪を、かき、この
つとく、とセツ、うら、舟の二つを、元禄
く、まの、奏者番の役使とす、この

一 朝廷の善治ハ百日以内、終に職ハ行
カ百回以上とすると徳川さんの方で政
事ことなるうつてある。

勘使と云ふ役ハ卑職と云ふ大なる役
である朝廷の三萬二千と預つて
あるもの事、實に勘使である今日の
室内者の内為家室を油を煮ると言
ふにやうなるものが天下の飲食油を
の買入ボロなる勘使が司るものである
ら、その人の正直を言ふに及ぶぬら
らぬ、自ら後徳があるから、万正
であることも言ふと云ふと云ふのである



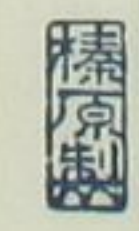
○此程千々々の銀を甚多船隻船模模型に就
て舟の研究家西村直治と就て受けが、彼はこれ
此船を竹排と稱し「テツパイ」と呼んである。淺い
水に用ひてゆく由り支那にも、殊に印を支那に
引ひ出さるゝ。桶形のこの舟の道具を云ふと
其も、船代の是の如きもの、桶の上を笠をかき、其
上へ人の腰をかけたこと、他に二枚の板の如きものあ
る、筏の間隔の中へ之を挿入し、是によつて
波を油子印する具と云ふ。

○今次の帰省ハ校友と共に船を載し、母川流の舟
勝を弄し、寒川に舟を設け、校友は、其の舟
の別業に主客の饗應を交け、其の舟を

扁額を書し此の別荘を天姥山荘と名づけ、
此山は大空を名あり、是れ天姥山の名かある
か、支那の天姥山と思ふべし、抑も是れ天姥
山、天姥山荘と別荘の名とす、歎んば、
か自人の為りと略と床に掲げれば、頼鴨屋の詩の
是川流を任を形、自刊りの七絶と家名の
と、同い、いかに、後漢の下半が異、且つ
頼家一流の趣味があるから、たか、

清頭如馬蹴菱鏡、碎後舟舳天如鳥、
一幅蒲帆風力送、古山却走駛於潮、

海府泊舟風漸甚、使際廿有七里達新
乃書似曰、平石、軒、戲、難、曰、才、二、句、

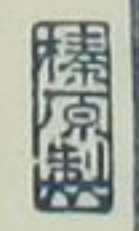


行字抑属酒部、将舟部、衆部、之一、也、
○今次、作者、之、節、本、意、を、述、く、廣、井、二、三、卷、の、書、を、
推、し、来、り、余、は、好、み、思、ふ、即、ち、余、は、此、年、未、も、
七、月、二、日、に、北、條、新、館、に、連、載、の、漫、談、を、上、下、
二、卷、に、別、の、二、刷、印、し、な、し、乃、ち、毎、日、の、報、載、活、
版、を、解、版、し、先、ち、も、南、の、形、に、摺、排、し、印、刷、
し、七、冊、子、と、し、な、し、社、中、に、余、の、漫、談、を、
ま、た、不、載、と、あ、り、興、味、を、以、つ、て、特、に、欲、く、な、し、
余、二、冊、の、書、を、携、り、一、部、隨、筆、の、芳、行、に、送、す、と、
同、類、の、喜、び、を、禁、み、な、し、
○こゝに、今、次、の、作者、中、の、事、を、さ、し、芝、田、の、出、村、高、森、次、
吉、余、は、終、る、に、史、記、評、林、廿、五、冊、を、以、て、史、記、

八市價紙屑の如くともさるる。此書各冊に感海堂
の花記あり、感海堂の手澤を託すものと思ひ、流
石、舞臺の如き物ありも持ち物、尚ほ形、乃の
旅舎、徳田、古中、平比きから、お銀を打ち来
り、その山、以、千、入、ん、こ、う、か、當、て、貴、家、の、和
花、さ、う、し、と、こ、ふ、七、と、い、登、り、蓋、深、く、あ、る、ん、も、今
ハ、あ、て、さ、う、し、唯、れ、金、さ、う、り、物、子、の、深、く、あ、る、の、み
と、金、拵、つ、て、之、ん、を、見、る、ん、唐、に、鑄、者、の、銀、あり
栗原、貞、乗、と、刻、し、把、手、の、兩、龍、と、刻、し、申、子、の、銀、の
上、段、肉、の、細、紋、亦、古、雅、揃、す、べ、し、未、だ、國、鑄、者、の
何、人、さ、う、も、い、ら、ざ、ん、と、も、極、め、し、佳、也、余、ま、た、之、
其、の、賜、と、さ、う、

○余、宮、内、有、御、歌、不、に、在、り、ま、る、中、家、派、の、し、應、有、り、年
壯、の、時、好、ま、れ、往、来、し、と、共、に、飲、み、共、に、談、す、る、を、快、と、さ
る、後、久、し、く、性、復、を、絶、つ、此、以、吾、御、里、に、浴、在
各、地、を、巡、り、四、次、大、市、の、御、傳、跡、を、談、し、且、つ、御、卷
を、投、く、偶、と、余、の、芝、田、に、来、る、を、少、き、特、に、出、走、ら、る、
疾、つ、て、余、等、の、指、ん、ん、を、今、も、列、ら、る、。彼、我、ま、た、ん、が
振、手、す、ま、れ、彼、ん、も、暫、く、後、院、に、不、存、を、言、す、ん、も、一、意、氣
高、旺、ん、さ、う、酒、河、往、古、を、流、し、終、に、彼、ん、の、書、卷、に
か、れ、談、を、下、拍、り、太、向、と、言、ふ、ん、こ、も、さ、う、あ、て、一、笑
ま、彼、の、休、賢、の、人、さ、う、か、れ、談、の、休、賢、特、の、の、油、味
也、彼、ん、御、歌、不、に、奉、は、甲、午、年、と、さ、う、自、來、画、筆、と
弄、す、敢、て、拙、さ、う、ま、た、去、く、流、す、る、の、時、不、與、り、し、ハ

遺稿より一冊二冊有りの一快りし
○紙後：ゆきすも毎れ必し今も七快法を換らすを例し
し此の二書傍親彦であつたか今も其人無く坐ちん帳紙に
くしめた。此今も其の遺品の産印に遺族苦心しつゝあ
つて自今も自知りし事と異らざるを得毎つた。即ち特
新の：帯身して、多量遺品のあつた白粉春三と治めこ
とらうつた。白粉の余り用ひられ電分法を以てし。余は
試みれば其の遺什を點検せしむ、曰く古文書といふ古
字に曰く印譜といふ印材曰く双魚巻書巻曰く古
畫幅、一二の類を除き萬人愛のせざる者のみ、唯れ余
の二書を改味のものもせしむる遺品の多く、唯れ余の
一見とせざるものも、殊に双魚巻書巻七十七卷



ハ時余が昔もて集めたるもの也、古文字古字紙亦殊
とすやきよめのものも、點検の條にせん故の人も
すも思ひありて感慨を傳へたる、余も昔故人との意
致を思ひ此種の、まゝ、毎理解の人に手はゆせんこ
とを遺稿とす、若し一人の手はゆせんが格あ
然らざるべし又者行を双魚巻書巻一紙價三千
圓の三類も余自ら購ひんと志を決し、其意を
白粉の先んば、先づ、二宮孝順に全額引元を交済
し、成らぬとき、の参考に治具す、果してめ今も成
行くやい豫想し得たる也、余亦故人が切角甚き
して五冊近出版し、全部完了に到らざる、紙
依志料、を何れかの方法に據つて出版を策す

このことを告げ、原稿の紛亂 **一** とおぼしめすべしと勸告したる。

○今日の散策中、杯一個を得、若年の撰杖を以て心の中を
返折反を存す、春風萬里の横をあり、華(徳川)軟倫侯
の揮毫に傳ふ、淡路に云く、芳山四行記念大正丙辰春
城(花押)往年若年行の時の記念物と云く、白
の花辨を描く、よの百穂(幸福)也、後款あり、古酒
人の烙印あり、此杯を此家の名をえん、何人が之を
不持の人、此杯の傳り、杯中は銀瓶のオトシを吐き
そのオトシの中一杯に、一撮先口の淡粉あり、●木地の杯
に酒を容るゝ不便あるが、おに飲くらしむるものも
ん、相承する百穂の題にあり、曰く、芳山撰杖、徳川

軟倫侯題後し百穂并(印)とあり、余は春龍
を考へけり、七侯の墨蹟一も花する、**梅**を
架中、この五き記念と為す所以也、七月廿三日記
○銷夏のらんく、浮世俗を潤す、旅心をえり出し、
讀あ、その歴史に就て、まゝに研究中であるが、如く、
家の書いれ、その國服を便するやうなものが、
角深世俗も、風俗を如く、書いれ、その
そのもの、
そのつれと云ふことが、
井の風俗がある、例へばお茶の、
その真行の、
の風俗である。上流社会の風俗、

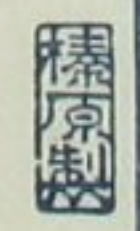
土佐や狩野の書かんとある。美の屏風も襖も巻
 物も細かく描きこんだが、美の貴族の鑑賞に供
 したものである。上流社会が市井の定況や風俗を
 を描きこんだ美を鑑賞するところからこの「物不齊
 代の影法師」として云へ得るから、由来我狩野土佐
 などの画の宗元としての由来するところから人物と云くは
 らる。狩野を書き山みも支那の擬物を、美が因
 習的の貴族の趣味の投じと来るとは、恐らく斯
 くの如きところから、我々の武将の鑑賞を定する
 餘り、淡泊の如き、餘り起世間過きれば、あたら
 せ著しもうや、世間的にもうや、喜樂的にもうや
 し、富實的にもうや、エロテツリのよをも兼ねたる

おもひ。今日あつてのりあるを、我々の血勇男児、百戦
 漸やく凱歌を奏し、比叟くん大将、漢畫系の如きは
 画もあつてあつて、力があつて、情もあつて、ついであつて、役
 著し、後には、色に、格を、漢厚を、兼し、た、お、あ
 い。この世の要求を、え、つ、狩野や土佐も、舊の法を
 墨守する。禪の行か、う、れ、全体う、お、お、お、お、
 爪の爪、必、信、を、主、と、し、比、よ、か、多、ん、を、え、ま、い、ま、い、
 多、り、吹、土、佐、派、の、衰、し、の、時、融、合、を、利、か、さ、る、画、家、が
 お、う、つ、つ、の、時、狩、野、家、が、多、い、役、を、つ、と、め、れ、狩、野、派
 徳、や、山、樂、の、時、の、武、将、に、完、ち、ん、て、聖、徳、の、聖、画、や、襖
 や、屏、風、も、も、作、つ、れ、美、の、時、豪、放、の、筆、が、多
 る、も、七、流、派、の、よ、か、ら、つ、れ、ま、い、の、永、徳、山、樂、の、市、井

の風俗をも描くことをしきりて、此流の人々亦
土俗流も風俗画せしむ。彦根松原流の蜂須賀家
の豊田神社臨祭の圖の如きものは、安永寛永頃
より多く作られ、是れが今日の存するものも多しある
正しく近利末から新画風の起つた。是れは後世所謂
の浮世繪と同しであるといふべし。此の如きものは、
馳とすべしと多く傳ふのである。曰く、風俗畫のあ
つたも、後世の浮世繪とも書風が亦しく違ふから、區別
せねばならぬ。後世の浮世繪の今も一體を為すもの
がある。京都の風俗画の先驅を言ふれば、浮世繪の
終に江戸のものとなりて是れ也。岩谷又兵衛の
如き江戸の浮世繪の祖と云ふべし。此人七久張

り上方仕の心づいて、是れを江戸へ移植したものである。
安永寛永頃、いづくも市井の風俗を畫して是れを
玩賞する。この平民のころうたの如きものは、
平民の鑑賞物となり、甚多の複製の如きものが
天衆の玩賞物となり、此れから是れを寺に終つて
賣つては、進歩をえた。初のめい肉巻と以て行
い、此の需用が多くなる。つねに肉巻の如き
ものも、その版刻が初まり、彩色を施す
ことが、初釋つた。此の如き、丹繪漆繪紅
繪のやうなものが出る。是れを終つて版の錦繪と
云ふものも出来上り、此の如き江戸特有のもの
である。上方の肉巻も、重んずる風習がある。

眼が軽視される。西條の頃より古田の頃まで
術のこときよめがある。あつて漢本の挿画の文を
書いた。後、西川祐信が出れば、又強り漢本の挿画
を考へ書いた。江に作つて錦絵を出版し、これをも
あつた。上方の飽道肉筆を貴古習慣から、版畫
の肉筆と考へてこれ彫らせんが、江戸の的組以後
發達し、所謂版畫の錦絵の画家と彫師と摺
師が三巴と考へて協力して成し上ける。この彫
せる意と肉筆の畫とを異なり、よめれば上方で
ハ個々の書畫を見つる及ぶ。刻と摺とが伴つて
美を為す画だから、畫は自身文の美に成る。



セント減ること云ふも亦ある。畫の画を心づ
つたらどうなるか。色をつけたらどうなるか。その
思ふに畫を心づかぬ、肉筆の画といふ
から異なる所がある。畫工の技をひとく進んた、刻
の摺の技がある。き道楽を見れば、浮世繪
を玩ぶよめ肉筆よりも寧ろ版畫を考へる。この
時代は平民文藝が起つ、狭斜藝術が起つ、浮世繪が海
行い、美の浮世の版畫を考へ、せしめる。世つて
木刀力があつた。江戸の花の画、浮世繪があつ
た。錦絵があつた。國民的繪畫と云ふ得る。この
此の錦絵がある。勿論種々の刊行物、此の浮

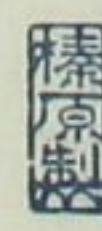
世傳か挿入せんと文豪らも是か一般に其いん比
観て其利に成り念す宜しある。

のそふ三菱の五千圓の手廻り(のき)全部返却す
こゝろに全き借金を身とす。不景氣時代
余も一七の大出来とす。可なり。殿女んハ七世余
弱の借金を着いたり。久しきことより十数年
前借金土地を賤ひし。海に。日清戦争保険
四千圓の借入をす。久しきより高き。困り終
借り替へし三菱銀行の借金の出来。其方返却
し。約千即ち。久しき。多き。海に。八千圓あり
し。七年三千圓返却す。出版部増資の
際余の挿入。七千四百五圓。四七一時借入。其に

んか全部挿入。全体或る程度。借金を
し。其と左のみ甚とす。及んば。成るや。何
七世き方が。二十日毎。の手形を。割引する。方を
有く。丈。其。法。接。了。況。人。や。利。子。七。積。ん。た。由
い。高。あ。は。た。を。や。余。の。性。質。性。情。を。構。い。ぬ。海。義
の。と。決。し。七。世。余。身。を。持。つ。る。よ。う。に。あ。る。事。時
代。の。其。由。借。金。も。あ。り。し。し。ね。八。七。卿。の。家。計
の。是。こ。の。け。け。ら。る。事。幸。し。七。借。金。の。萬。と。起。く
る。こと。も。今。任。つ。ある。家。産。土。地。を。曾。て
一。比。い。も。操。作。し。入。ん。事。こと。も。容。災。に。倒。ん。た。事
家。を。回。復。す。る。事。も。敢。て。借。金。を。七。和。局。を
と。る。つ。も。建。築。費。を。并。し。お。高。の。剩。餘。あり

只にちりつてき纏くつた後今日の出地を購ひ
入ん折りの借金をししに、小拂畢つて初
めて双肩の軽きを感したり、是れ此のせり
幸き世の中は幼ることの出來れ、早大は意
外の^多を得たり、信のつみ 七月廿七

〇昨の教養中書行を過り山東京條の畫物
を購ひ得たり、墨提を畫し、並表の上頭元ある、^〇
午頭神祇をもとて、^〇提下、^〇道中細徑あつて下
層根解あり、提上は男女二人、^〇上頭の一陽、^〇月
あつ、^〇一分を題す、^〇あや宝月の中、^〇さる都鳥
福後の繪より、^〇幅也、^〇我々ある幅、^〇性、^〇恨
前段、^〇墮ち、^〇室、^〇揚くる、^〇能、^〇か、^〇ん、^〇其、^〇性、^〇を、^〇英



此す、架中、^〇望、^〇く、^〇ま、^〇ま、^〇る

七月廿九日記

〇流を大濤が昨年上段に、^〇あ、^〇存、^〇昌、^〇益、^〇と、^〇自、^〇然、^〇真
堂、^〇造、^〇し、^〇造、^〇寫、^〇し、^〇一、^〇冊、^〇の、^〇書、^〇を、^〇獲、^〇た、^〇二、^〇三、^〇日、^〇未、^〇就
後、^〇す、^〇ん、^〇ん、^〇マ、^〇ル、^〇カ、^〇ス、^〇と、^〇七、^〇世、^〇紀、^〇下、^〇七、^〇前、^〇に、^〇在、^〇つ、^〇て
早く我日本に於て、^〇略、^〇マ、^〇ル、^〇カ、^〇ス、^〇と、^〇似、^〇寄、^〇り、^〇の、^〇説、^〇と
立て、^〇九、^〇あ、^〇存、^〇昌、^〇益、^〇の、^〇重、^〇農、^〇主、^〇義、^〇を、^〇略、^〇叙、^〇し、^〇れ、^〇よ
る、^〇が、^〇あ、^〇る、^〇昌、^〇益、^〇の、^〇著、^〇述、^〇の、^〇原、^〇稿、^〇の、^〇由、^〇を、^〇狩、^〇野、^〇亨
氏の千々入、^〇狩、^〇野、^〇亨、^〇の、^〇著、^〇述、^〇の、^〇原、^〇稿、^〇の、^〇由、^〇を、^〇狩、^〇野、^〇亨
日本に於ても、^〇昌、^〇益、^〇主、^〇義、^〇を、^〇明、^〇道、^〇し、^〇る、^〇よ、^〇あ、^〇る、^〇
し、^〇し、^〇こ、^〇が、^〇眼、^〇の、^〇光、^〇の、^〇洞、^〇に、^〇決、^〇し、^〇る、^〇人、^〇に、^〇透、^〇ら、^〇ぬ、^〇と、^〇云
ふ、^〇れ、^〇こ、^〇と、^〇を、^〇受、^〇へ、^〇し、^〇ぬ、^〇れ、^〇が、^〇昌、^〇益、^〇の、^〇書、^〇は、^〇百、^〇冊、^〇も、^〇あ、^〇る、^〇大
都、^〇の、^〇こ、^〇と、^〇を、^〇受、^〇へ、^〇し、^〇ぬ、^〇れ、^〇が、^〇昌、^〇益、^〇の、^〇書、^〇は、^〇百、^〇冊、^〇も、^〇あ、^〇る、^〇大

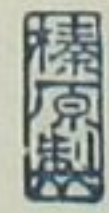
三徳の比が例の大書は失くさじ比唯比とある内十
二冊三上日冬次は貸して置いたものが僅に三書
を免れ外又同一著者の著述が或許の符印
の手に火災後入つたのが材料とすべし此の著述
が去来にのみある。著者は就ては始のりゆりる人が
更らふからうらうら比が此の原本の表紙重紙に
種々の反故が張り込められてあつて多しに伝へ
かた確龍を良中が即ち安藤昌泰である
ことが分りし。寶曆頃の人で秋田に生れて遠
を業とし、後八尾に移つて遠業をこせむ
相与多々の門人のあつたこと其の姓名もあつ
かつてゐる。○もん著の強人と日本全志に載在し

標本

てゐる所を見るとあるの比の間に度々行はれ
か推測に難くさういふ。あるは如何なる身分か
と云ふ是れがすまハツキリさういふの邊域である。彼
の秋田の休多屋瀬の平田日島流に似たりやうな所が
あるの、一時は信淵の父であらうかと臆測され
こともある。彼人の野々外四の事いふも報中
去来をうらうら比にともあつてゐる。亦ある研究
の結果、彼の著書は二種も出版せられ、多しが新
増書籍目録に載つてゐることを知れた。多しは孔子
一世解記二冊、自然真実七書三冊、多しが安藤
良中の名で寶曆四年に發行せられてゐる。此の
書がとらへて當つて世間知らぬもの何故か

あきらか

あきらか説く所の自然真道の目的は法世より自然
世へ大衆を導くのである。而して法世より自然世
後に行くとはいふも橋渡が名実とも云ふこと
は就ち農本共産主義に依らざるをいふと
ある。共産主義と云ふも帝王をも認め、君
臣の別をも認め、諸君の職を治之れと認め、
あるが、君も臣も治るべきである。此の
亂世にあると認め、上下の別なきも、一定の直
耕を為さざるも、同様の差があるとい
ふも、このことである。是が今日の左傾流の従つて
異なるところでは、活波獨特の互性活真の真

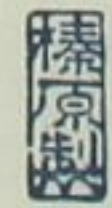


理から割出し、此の世である。徳の平和主義を敵を
の世を怒り時代を懐くこと、この世も賢明を
か、半ひ七半一か、殺戮の善の兵を用
いること、一切不可なりとある。この世の所
謂く自然世に於ける理想は、この自然世に到達
するに他なる方法として、先づ農業を奨励
し、生産する未熟穀を不耕食の徳を導く。
いかに飢餓の甚を知らしめ、単に凶あや言論の
みよつて生命を維持し得んことを示す。徐ろに
及者せしめ、而して後之を論じて農業を方面に
就かす。いかにある、是が善い女存君を
の世の世の一大特長とするべきことである。

（即ち大濤の原文を抄す）

若者曰蓋の眼中三ありて聖賢ありて不耕貪念の徒の聖賢のありて何人等と問はず攻めりて一歩も譲さざりし所又彼れの大膽なる高氣を乞ひ、彼れが不悟の聖賢大儒を片べらからこきおろす一篇も痛快あり、莊子に就ては左の説を為す

莊子不耕貪念、徒らに高き高きを為すと云
悲しい外十卷の云々悉く自然を知らざるを
言ふ、莊子胡蝶と為るが胡蝶莊子内と云
るかといふ小兒の戯言あり、養生主論の曰く
涯りある身を以て涯らざる欲念は向ふに
離るべし。是れ莊子自然を知らざる身心



を以て二別を為す大失あり。天地篇に果、天
地大なりと云其化均し、萬物多しと云其
治一なり、人多しと云其主一君也、是れ天
地を語りて天地の正體を知らざる也、萬物
の治と云ふこと之れ無し、牧畜と云ふこと
治の聖人出づ、上は主ち、乱起りて後有るこ
とあり。乱に附きこの次也、萬物を治と云
ふこと當せん無きは、何を見ては歎言を吐
くか、天地一体萬人一にして一人を自然天地
の人倫の君臣と云ふ貴賤の差あるべから
ず、君と臣と聖人出づ、天下を盜み私法
を立ししは、後ある名あり。又天地に

通乎者、徳也、徳也、萬物を行ひし者、道也といひり、道
と徳とを二つの如く云ふは、吾失き。自然なる道は
天真なる徳の天気を謂ふ。故に真と氣といふは
その二別あり。徳を曰ひて徳の正体を知り
道を曰ひて道の本体を知る。

天道篇三曰、天道運りて轉る所無し、故に蒼
柏成る、帝道運りて轉る所無し、故に天下
仰ぐ、聖道運りて轉る所無し、故に海内服
す、是れ自然を知りて、孰言らざる、若し
天地の生々直耕、人之んを継ぎ、亦直耕安ん
ぶ、衣す、是れ自然の自感進退の一直の氣之
れと道とを、此れ道ありことなり、莊子

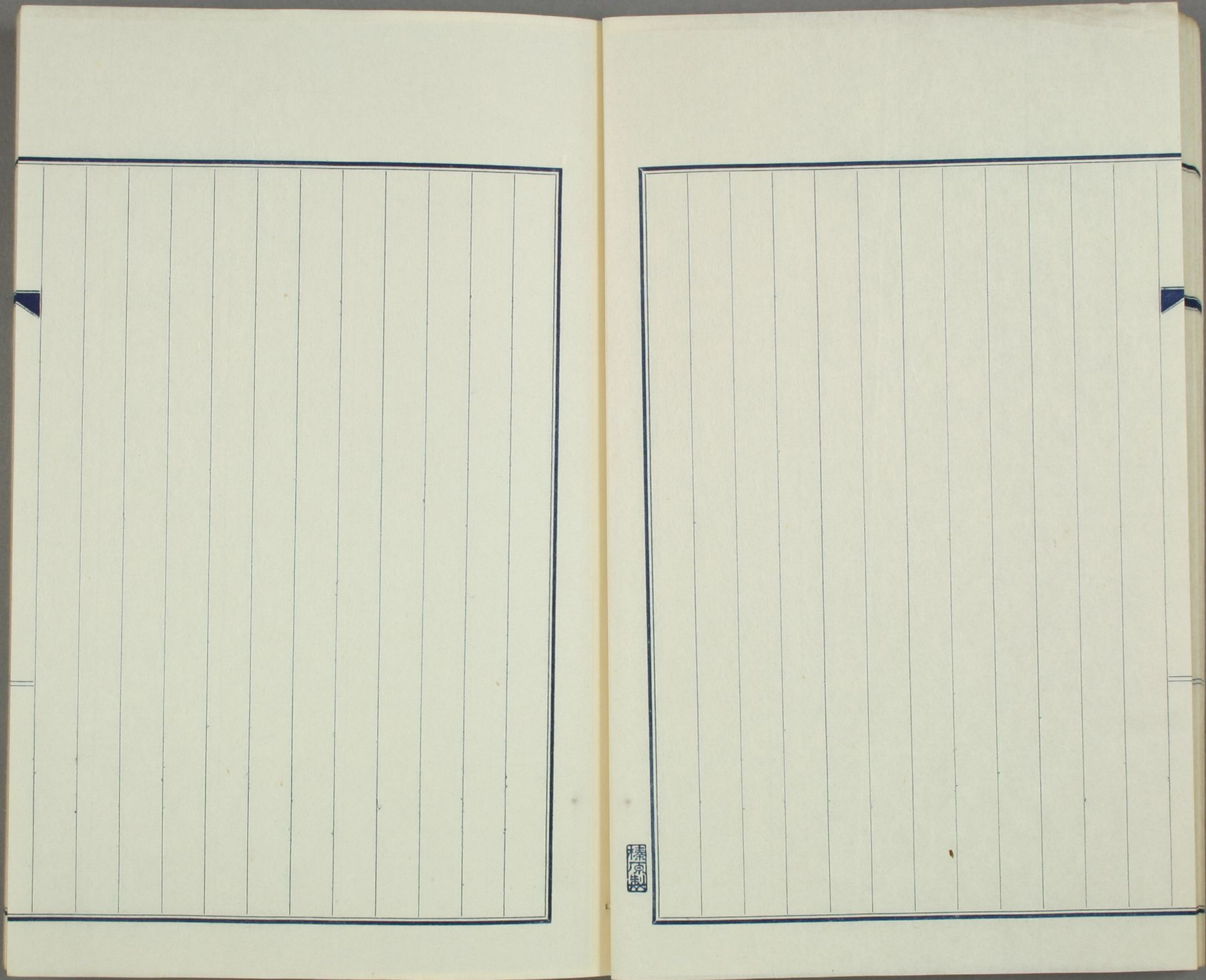
の所謂の道といふ道を、盜みて上りて、私法を
莊子自然と知りて、

平和主義の若者、太公望と軍學を、如何に評して、わ
るか

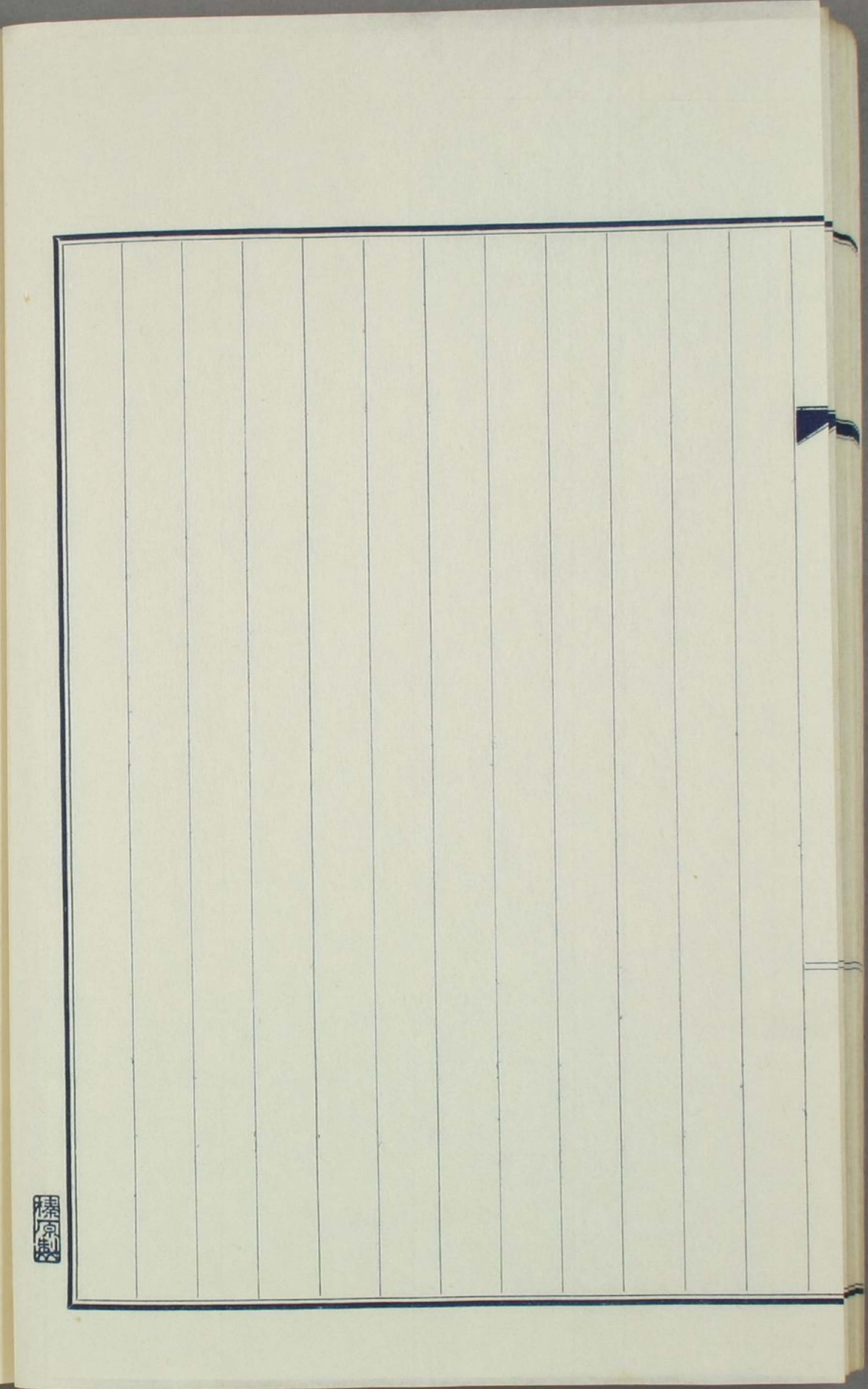
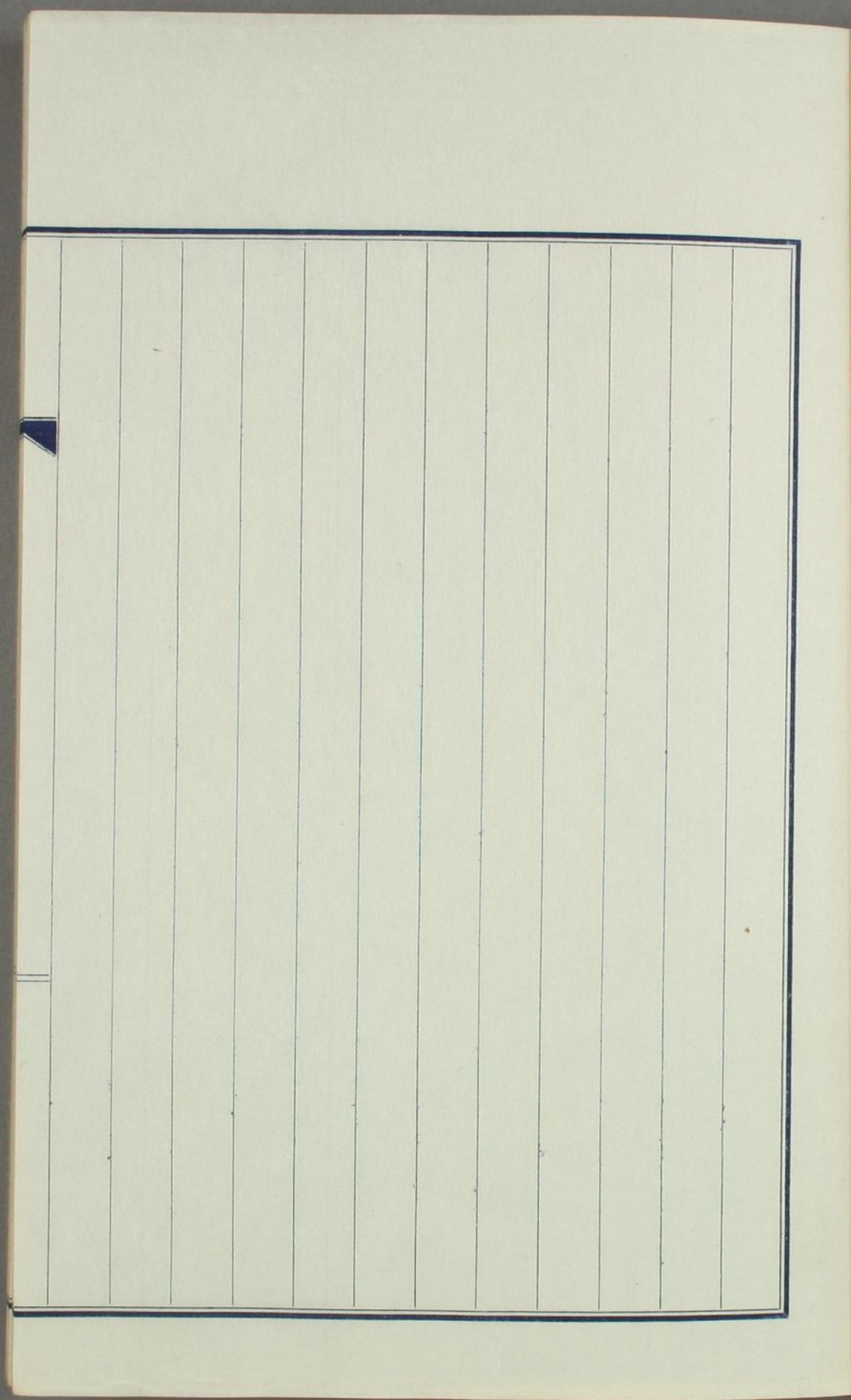
軍學の無用の子、太公望六韜の卷は、是れ大失の
始めなり、自然なる直耕、安んぶ、衣す、天地と同行
する、其の治乱無く、軍學の名あること無し、聖
人出で、王と爲り、上を之て耕とす、衆人の直
耕を食ふ、此れ常華を人に亦す、故に之を常華
と爲り、王位を奪ひて、己の王と爲り、常華
を爲さんと、然る故に、兵乱を起して、此れ統の
者、王と爲り、不耕、食人、官を爲す、其の

もし軍起つて勝つ者は王とす、不耕采^ノ卒^ヲを為す
此の如く伏羲も、今日に在るまじ、治して止むことを
し、軍卒の天下國家を治めんか、為めと云ふは、
天下國家を治めんか、為めと云ふは、乱^レ死^スあり、
實に治乱共と乱とす、治乱無き直耕の世と
為す、則ち何の為め、軍卒のありんや、速に
軍卒を治^レ徳^シして、刀劍械砲^ヲを治^レ夫^ヲも凡て軍
術の用具を減^シせむ、軍兵大將の行列無く、
止むことを得^ルし、自然世に帰^スべし、
治^レ乱^ルあり、不耕貪^ム食^ムして天道を盗^ム
上^ニより、采^ノ卒^ヲを為^スる、因^リて世^ノの聖^人
太公以下の治^レ乱^ル者^ノを治^レく、
浅^クま^ルべし





墨



張守

○後然に伯かして 岡の池の以下本印と没ありし文
行本に本尊段の景合本三冊を獲りし亦琳瑯
に方氏墨譜十冊も附あり前著の海東本後著の大本
月と共の解のの正本也大本の墨譜殊に獲易か
らず其に珍存するも是の外に朝鮮傑僧松玄
源河の集四冊と羅山四演布集三冊李忠行難解
二冊表忠河起初一冊、韓版本と摺るものも頗る得
難し松雪の文祿の役か蘇清の陣中と倣語
し等々のもの日本にも流米の傳る朝鮮役の史
料なるもの也官本史館古流の川口長孺の右府史
館の沿革と漢文の叙し等々の史館草紙
史館の沿革家苑のあつるものも自ら異

世

七月巻日記

○昨の骨董鋪を過り小品茶具桐を獲比高さ六寸
幅八寸許、相如なき粘紙より上頭と桐あり、二枚の間に
下部の大小三個の抽子あり、善造離壇のついでと
異つて気味おろよい、木地作である。何んと云ふ目的
もよく辨ひ未つて、さて何れ用むべきやと案し、此が
差あり小品圓者を置くとべしと、辨を任かせし、小品桐
を入んたる圓者部類を搜りて試み入れて見る
とあるおこ体を得し、其のちと茶具のお陰と案
人此小品桐に種々幾多の異物と交せし圓者を置
いと、一向に見え茶のさへ、敷乱し仕末の困つて
おれが漸やく辨正理かつた。自今、の豆本類の残ん



と全部を却りたが、偶れ残つてあるものかいくらの
ある。洋本部類も三本、各圓のふり書が十冊七
あり、洋本五本の詩集が三冊あり、素性の法帖
五本詩歌、経巻の二冊、法華經が巻子と折
本と二行あり、七葉渡の物を一巻、胎内紙が一巻、此
其の皆極めてふるものか、んが拾ふ此の桐に入んて
一杯となる、巻子の類は上頭のものある桐、ついでと
ついで。五本の音函類も七八頁あるが、見えはすべし除
外し、すて者物類を入ること、たゞ、たゞ書物類
の一部が入らざるもの、そのまゝ此桐に置つて
置つて、こゝに、見えの藤本深氏、信西百卷、カ
ルヤ二種沙翁全集(書架付)錦堂印本の類が

ある。此外に國者部書に入らざるもの、唐筆の東海道の編
創や哥曼美人傳の傳創、エデンハウの風俗圖、野宮漢の
風俗圖、下後石の似顔、といふ類の互本式のものがあつたが
皆北類に入らざるものか、ゆつと十行と集の北品本の名
残るもの。

○北品の銷夏の手紙といふ種々の國書も平高りな
綴り、漢人心のあつた、一ある後々秋の北の人、文芸士池田
亀雄の考い北品宮廷女流日記文藝といふもの、池田文
芸士の香安朝の世説文藝考に風味を感し日
記や家集らむを廿三行すの類細く考証し北と
史考も記してあるが、少くも忠實に世流日記を
考証し、内容の大略を叙してある。北考に納め



あるもの、かげく小日記、和歌式部日記、禁裏式部
日記、更科日記、漢政典侍日記、十六夜日記、禁
内侍日記、中務内侍日記の八種、過去さるもの
皆さるもの、持綴がある。北考の日記の多くは
王朝時代のもの、鎌倉時代にも及んが、女流
の方の北品ものも、も保蔵さんであるとも、先が感せ
ることを得るもの。和歌の考へんは行り北時代はあつ
から、女流、傑出したる文芸考者が宮廷にあらは、こ
れを怪しむるもの、和歌以外は北種のよもを
然し北の文芸のお蔭と云ふ、保蔵さん。日記と
云つても今日の北品日記の如く、今日の國天侯や入と
の往来を記すもの、さるもの、さるもの、さるもの

古き故よりしてあらず。勿論日記の性質として人々示すところなくして自ら自身の考ありき。私業であるからその著者の心情が節りよく書かれたものである。興味もあらず。亦當時を知るの料ともするを得。この後宮の秘録ともも珍とすべし。この西洋人七早く此程の二三のよを譯したこともあつた。仕末である。予文の界に此程のよは漸く興味をもち、熱心に研究し志すその出で来たことと喜ぶことである。八月二日此のや午後長崎へ往くかゆと書物漁りをも神田まで行き一二の回書と購ふて歸る。

宮本大形本和漢朗詠集四冊



各冊の末に法橋洞川口口とあり。中後目録花巻風土記とあり。この書と見比べると此書は氣を引かぬ。よく書くともな多。地物換入詞の多し。むねお前の通あり。満海のもの古くは書きよ。自らも楽んが。宮本大形本とあり。いかに好むものありん。寛永自ら故つ。當時代の産物に好くしをあらん。

本朝美人鑑

五冊

此書貞享江戸版

花代もしの若高き美人伝を叙し揮
画あり丹緑彩をとり丁寧にして
あり、後下ふまゝにせんもしりしめ
人の絵ある軟本の概して價高き
此書も一時五十圓の價ありしが
これハ幸々三十圓を三千入り
なり

〇閑に位をいさぐの及故紙を揀出して例の翁
助雅夢のアルビに貼りしは、和書もよきとせ
るよの多けんども、もの興味あるもののみを奉
へん



一 小林龍樹の素紙院志上の圖

三枚つゞきとるもの次廿四年一月
十七日見行也就持本の油紙を
又描きしあり

二 楊梅園の錦繪

時代うゑみと題する美人繪
の内妻亦頃の嬉々供上欄
に双六をうつり圖あり、此の板
画こそお相伴ひあるの跡也

三 石田為春の畫行

これハ複製あり、攝丸院にあり
田式部少丞板とある包紙に書き

写真おき

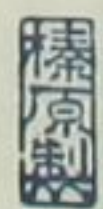
四 世界大戦の即ち龍動市中に落下し
た爆弾の着陸の島嶼
一枚元行協会よりとせりし
るもの也

五 西暦海初の圓 三枚つき

あ政二年築造の時の圓より重宝の
画き

六 昔の紙書二枚

昔面の寶印を捺し他面に紙書に背
く時天刑を交ぐことを記すを例
とし之んと証文を法つけり



七 株券一枚

明治初年内外用達令此の券行し
しもの社頭と南支那支那人の
井田ハの名あり、表面の文に云く
右者南社の規則を遵守し基本金額十
萬圓分株一万ノ内金十圓即ち一株ノ券
起持主タシテ酒ゆらん也

紀元二千五百三十四年七月十九日

社印より洋字ト和字ト

裏面ニハ或四十五ノ
井田領収の欄あり

形ハ表面ハ長廿尺二寸幅四寸許、裏ハ

横に欄を設く。

八 伊勢の油屋の配り抄

奉書二の折一面より梅やう出し字
勢音歌踊りの圓も彩も入るを画し
一面より伊勢おんしのかさみ至と題
して古歌を著刻しあり。當時油屋
に遊びてある誰の世尊ひ受てか
例るるし。今ハ珠くきこしのとろろ
り

九 袁世凱朱紙名刺

十 星出丸并小燈湖山宣傳の二枚

十一 長崎紙行神社の洋字ミニクジ一枚

標原製

十二 杞密院會儀の圖 在版繪をも譲受の

面貌皆字の實りたるは、杞密院
開設の際の圖と云くは、伊勢協文
ハ譲受也

十三 基利支丹分布日本地圖 東京協士館

十四 西南の役電文官鳥尾中將と西郷中將

大政官の文書一枚

十五 吉原協設分國譜 報社社發行

十六 大通通寶一枚 表面版

古銭を擬して花柳通と滑稽を評し
しもの

十七 浜尾重山日書ニ河内東湖が談話と心

リ華山の人物を祿位の拓本一枚

十八 飛鴻堂印譜中の大印四五を模刻の
印契数葉

十九 延暦寺印三顆印契

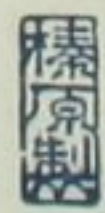
二十 伊勢朝熊岳萬金丹賣幣免許状印體
委任状書類

二十一 世果大藏中備乙克行の紙幣三枚

二十二 惣惣文書五引札

二十三 池田新村字并詞快歌圖

此種のもの十枚冊のアルハム鶏助能又ニ或る枚取り
こみあり以上は前記のアルハムに収めざるも也
の諸書のつれくま平あり治人院を後記時を納



してあるが中一寸感するやうなる日ごとがあつても、端
うらまんと仕あふ、ものあつくりから商賈もあ
ちいて置くとべきだと、一二を考まつて

莫の女皇エリサベスレも、情人が廷臣中にあるは
が女皇のそとへ用心が深く、情人も容易に

取地を興つてゐる。あつて、情人の心は

一伯知と云ふれもあるが、えん別も、権柄ある

地位を興つてゐる。自分か、さうするだけ、茶

一三権の一部でも、割具する心、さうする自分か

友死つて、こととさうと、氣をたかふれと、権

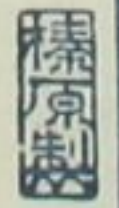
度史話を書いたあつたが、さうくあつて、さうい

ふ、二亦る、昔の昔の、あつた、得れ、こと、あつた

よく書物といはれようもの様々一枚く裏打を
すまふといふはむらゐの飽きも原家そのまじ
を見せることか本あるある。支那の裏打
をすまふ代り一枚く他の紙を差入れる。こ
かよひ方法がある。日本に七紙法が用いら
れる。まゐい何んといふてあるかツク
うんたか、フグも入ると書物の中
云ふてある。そのまじ

山刊の「日本」の五十年計畫に靴を考へてある
時今流行の講が考へてある。まゐい

モスクワの靴が無い。五十年計畫を追ひ回
らす考へてある。まゐい



とある。そのまじのまゐい。まゐい。今この靴の
まゐい。既述のパンを記す。そのまじ。連し
たのまじ

浪書と書刊する上。能徳の西勢に念強を出
し。此のまじ。本場は。西勢のまじ。初め
こゝろ。此のまじ。先以。西勢。後。今。折。宇。組
島の久保。考へてある。サ。方。一。品。の。書。一。紙。西。勢
の。像。が。描。け。て。あ。る。が。恐。ろ。く。西。勢。像。の。内。を。ま
ま。し。う。い。ふ。か。あ。る。ま。じ。此。像。の。形。像。九。に。花。も
菱。の。紋。が。あ。る。こ。ん。い。こ。ん。ま。じ。知。ん。ま。じ。ま。じ。ま
じ。少。ろ。く。ま。じ。ま。じ。ま。じ。一。枚。獲。て。あ。る。と。西。勢
研。究。家。の。恐。懼。し。て。あ。る。

木を旅を後に見えしは北次も此の如し久松龍溪
の道徳海に出たものである初め木をが龍溪の
出た時の木をが龍溪の龍生であつた時と
語つてある。こゝに就て北次誰か龍溪を知つ
たか現存生がそのいかに著きうまうたか考へ思
ひあつたらうたか。後には一人を待たせられ
る北次久松集一が一幅のみをもち去り余の鑑定
を求めた。題は龍溪の書であるが、画は後、龍が
その画のその人画と云ふが、一より出来もある。
久松は画七洲使ひあるまふかと思ふれが、龍
をえたと人の龍の才を褒めし詩があるを恐
く北画のその龍のえし人の画であるうか自分



誰か見ぬかひつきあるまふかと思ふれか後
に龍の書いかにと龍の天の首端の北詩が
収められてゐる。詩中「わや」云々とあるのは、龍
か秋田の龍山を指すか。時夫後と賛成する為
に龍の手紙と並べたことかあるを疑ふを厭する
か。あつた。龍の書を出したところから、龍の書
と龍とあるから、わやと云ふことか、龍の書
とあるから、龍の書、龍の書、龍の書、龍の書
と書いかにと云ふか。龍の書を知るかのうけん
か。物し得るかと云ふて、友人と物をもてし心あるか
無つたか、愛とありうたか。犬養木をたを得たの
ひある

家名のついで、書畫の尾が幅をおこして来たこと
製するに終買の氣がおこり、一方の前後の
橋岳の十六羅漢一幅を精つた。自分の教を精
告を喜ぶふいふも、そのうへに筆のこんり力
心のものである。下なる熱海の道造者尾に似れば
を習得するに十六羅漢がまづとある、そのやう
ハ極致の交つてある一人の羅漢ハ重々筆馬一
の、橋岳風の面影の家、壯重味也ある。幅はま
て紙紙全泥の字は、表はみえんてみる幅極七
致である、この退定法を、後を、掲げて以
ての供してある、或る境念もある、退の塔内用は
贈るとする、是が無いむじやう。



○永田吉山(香沢中)の「龍峯」掲白しと後人が見
中の一萬年と題し、一萬年が、その関東大震災
に罹死し、幾萬人の名流を一萬年の後半を保
し、いと、心、種々研究し、経路が委し、書
てある。永田の香沢の、時、市、助、後、市、
長、
てある。何ん、
通若宮山階宮に、三、
外國人二百名、
元功、
か、
て、

正木美術学校々長：圓つたり、智恵の命を、お後とし
たりし。一萬年の後を物とするか、今死に
候の百いことびある。一萬年後の地球がどうな
るかすら分らん。文字をどうもどう変化するか分ら
ん。人名はけい、邦字を書くとも、漢字の仕末はけ
い、後世の人の文字に書いて置かぬか、どうも、あ
つ、邦文も書いたら、外は英文や工スベリ、書
いて、名を名に添へて置くこと、どうも、名馬は、何れ書
くべきか、就いて、智恵の命、智恵の命、陶
名を焼きつけることが不滅なところ、あつて、水
田の故郷、淡路社に托して、タイルを焼きつける
こと、どうも、紙は、最上の句紙を用へること、どうも、つた。



タイルは、縦六寸横八寸厚サ三分、表面を、雨と七
十五名、百五十名と一枚：認め、全部五萬四千
名の名、海、タイル、数約四百枚ある。此のタイルの
四方、蓮葉と、唐草の模様が、浮かせて、牡丹と
あつてある。

此の名原を、~~海~~びう保存する、就いて、先づ、一、文書
と、消毒殺菌する。そして、之を十分の厚味の、ガラス
球の中に入れて、全部、玻璃を以て、密封する、此、玻璃の中
に、真空と作り、空気を、以つて、真空、外部の、空
気を、取り、去る、と、する、こと、此、板、此の、玻璃球を
更に、厚き、鉛球の内に入れて、次に、此、鉛球を、アスファ
ルトを、以つて、包み、更に、木箱の中に入れて、木山、灰を

読めど文中このアスファルト地を容れんと云ふのが
設計の大体である。

名匠氣華者の内なる存する人がある。三殿下のお名を
次方の章下へ成り、柳原三喜子、入江為守、後藤武子
滝澤栄一等も書いてある。最期の設計は地下の埋蔵
する苦みあつたが、是れが変更して霊牌也を造り
て是れに納めると云ふ、是れが高命山に建てる此の
霊牌堂は老翁年保ちもしきいから、今年毎三改定
せ給はるるまゝ、是れはどうか、是れは「書いてある」
○箱根に遊人が退屈凌きは篠田胡蝶庵（鏡生）に
頼まれば、此の百話の序を書いた。此人の前は幕末百
話を書いた人が、自今一回醒合せども、會するが、自今



の序後の難話をも面白かつ、是を筆記して取り入
れしつゝ、是れ縁ねが序を書き、末に、自今が序
を書いた要點は

- 一 道の次百話の幕末百話の延長である
- 一 慧眼の徳筆家の兄痛がさすの舞臺の幕
末との流の初頭である

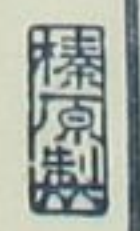
一 此間の演劇は、慶應時期に撞突もあつた撞着
もあつた喜劇もある、悲劇もある。唯此の間は
ある、その自今が演劇をも演じて、その自今も
人の氣が付き、振り返つて見ると、熱汗もあ
る、そこは興味がある。

一 ある新陳時代の甚くあつた時代の世相を活き、此

法心他日に残すこと母の地善家とよい念てある
一 世間の著述家に残り大拙の零碎のよに拾いずん
惜れりるも時ツストしてあるが、最もよい材料は、その
法心ツールによるもの

・ 零碎の材料の歴史も昔のいふが、文献も存せず
人の流柄もさうさうは、煙滅して仕舞ふべきもの筋
のよに、是れは夫人の記憶を僅くも存することあり
ある

・ 是れを今日拾ひ挙げ、徳封の世に残るよに誰
しれ自ら聴きし視たり或は体験したし、拾遺も
秘話を一のや二つと有りてあるよにあり、是れ
を聴いてやるといふの、地善家の忠告がある。

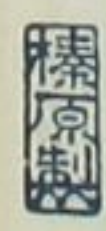


一 胡蝶庵の傍居度披骨を評さるい人の有願ん
此揮話を以つて満ちする人いふから、煙滅
と評してあり種も流かす、是れ忠告である。
一 一つの世に世田しこと、市井の瑣事、常々閑却
さんて、世の中の大故のよに、是れを注ぐ、是れが
是れ時代の世相を知らんとする時、よに一つ七困
つて、揣摩、臆測を逞め、多くの場人々
とんは、空法である。

一 臆測を何十枚も書くと、由話キル事實の二つ
むせ二つむせ挙げ、方の能く、雄弁である。
是れが出来よ、いことよ、よに、小故を閑却して書
き記し、置つて、いふ、いふである。

一 隨筆の材料は決して在るに溯るを求めざる及んば
 亦速く求めざる及んば、此の眼を眼前に轉かす
 みるは、少くも好材料がある。唯此の遺珠
 を大海から拾ふこと、隨筆家の頭と腕と在
 つて存する

こゝろを授る出鱈目を書きさすつてやつた所が、胡蝶庵
 のひとくま老人の御心を穿ちてきた。是れは、持てる自分
 の兒戯の心持をやる編輯をやつて、時々の自から恥
 ることと心持をさするが、先生は後人と自分の云ふ人とも
 ことと悉く思ひ、巧を編んで思ふこと、初めて心持を
 さす、昨今其熱を忍んで校心中、一陣の清風が吹
 ぬり吹き来るとのれやうな氣がするところ、云ふべき



明治百話 目次

- | | |
|----------------|---------------|
| 一、首斬淺右衛門 | 十三、山田實光死刑の立會 |
| 二、國替とお國入 | 十四、開拓使の官舎住居 |
| 三、明治の思出咄 | 十五、加波山事件の探偵 |
| 四、明治の興行師 | 十六、築地の海軍ヶ原 |
| 五、淺草新地と猿若町 | 十七、明治の通人蘆城翁 |
| 六、各區扱所と區務所 | 十八、日本看護婦の嚆矢 |
| 七、芝居道の選舉 | 十九、出場と出齋麥 |
| 八、木戸の奥さん井上の奥さん | 二十、教導團の生徒 |
| 九、外人の見た明治話 | 二十一、明治の漢學塾 |
| 十、横濱の開化咄 | 二十二、矢野一家の横濱上陸 |
| 十一、岩倉卿を背負つた話 | 二十三、明治の小旗本上り |
| 十二、向島の先憂莊 | 二十四、明治の新橋藝妓 |

- 二五 小栗上野介の西洋館
- 二六 明治の按摩の話
- 二七 ちゃんちゃんの吊し石
- 二八 明治名物御所の馬丁
- 二九 家庭看護婦の嚆矢
- 三〇 明治の子供遊戯
- 三一 明治の鞠兒
- 三二 長門屋と好文堂
- 三三 赤坂溜池の變遷
- 三四 砂利掘と徳島藍
- 三五 硯友社の創立話
- 三六 寄席と講釋師劇
- 三七 明治の質素儉約風
- 三八 江戸ッ子尾形月耕
- 三九 上野の鐘の話
- 四〇 浅草觀音様の附近
- 四一 松林伯圓の一生
- 四二 吉原から新橋
- 四三 花替の元祖花魁
- 四四 明治のいろいろ話
- 四五 明治兎賊渡邊金兵衛
- 四六 女學校の嚆矢
- 四七 札の木蘭と漢語
- 四八 樂研堀の報知新聞社
- 四九 東京日々の編輯局
- 五〇 吉原の山口巴
- 五一 錢湯と床屋
- 五二 數寄屋河岸松竹床
- 五三 木場の鹿島庭園
- 五四 鹿島の寫眞道樂
- 五五 梅川亭の一夜
- 五六 實話花井阿梅
- 五七 明治の演說流行
- 五八 町内歩きの商賣
- 五九 杉の森の素人旅籠屋
- 六〇 芝居寄席の改良
- 六一 市川團十郎の生活
- 六二 駒形のみまわりばなし
- 六三 統監官邸と魚源
- 六四 明治文化輸入の外人
- 六五 日本橋室町の話
- 六六 藝妓遊びと道樂會
- 六七 デパートの日比さん
- 六八 明治の大丸吳服店
- 六九 明治郵便集配人
- 七〇 集金人の役徳
- 七一 横濱の茶焙師
- 七二 吉原名物のあぶ玉
- 七三 海軍ヶ原人殺探偵書
- 七四 海舟を圍つた人
- 七五 芝の日蔭町通り
- 七六 山の手胸黒下町のエリ黒

立上り大牛の夫とてなるとく湖つゝおめとてふ心さへ

七七、潰れた大關蠟燭屋

七八、牛肉店と小間物店

七九、外人馬丁の元祖

八七、お掃除の今昔

八一、明治時代紙鳶の話

八二、澁谷の玉川水車

八三、烏森藝妓の西洋咄

八四、江戸の面影佃祭

八五、御祭禮の交際

八六、火事の一つ話

八七、巡査の昔話

八八、文明開化の家庭

九七、八丁堀生れの星亨

九一、明治の娘義太夫

九二、殺人犯の中川吉之助

九三、破獄囚中川大八

九四、興行物で賑ふ煉瓦通

九五、洒落ッ氣の世の中

九六、新富町島原の遊び上手

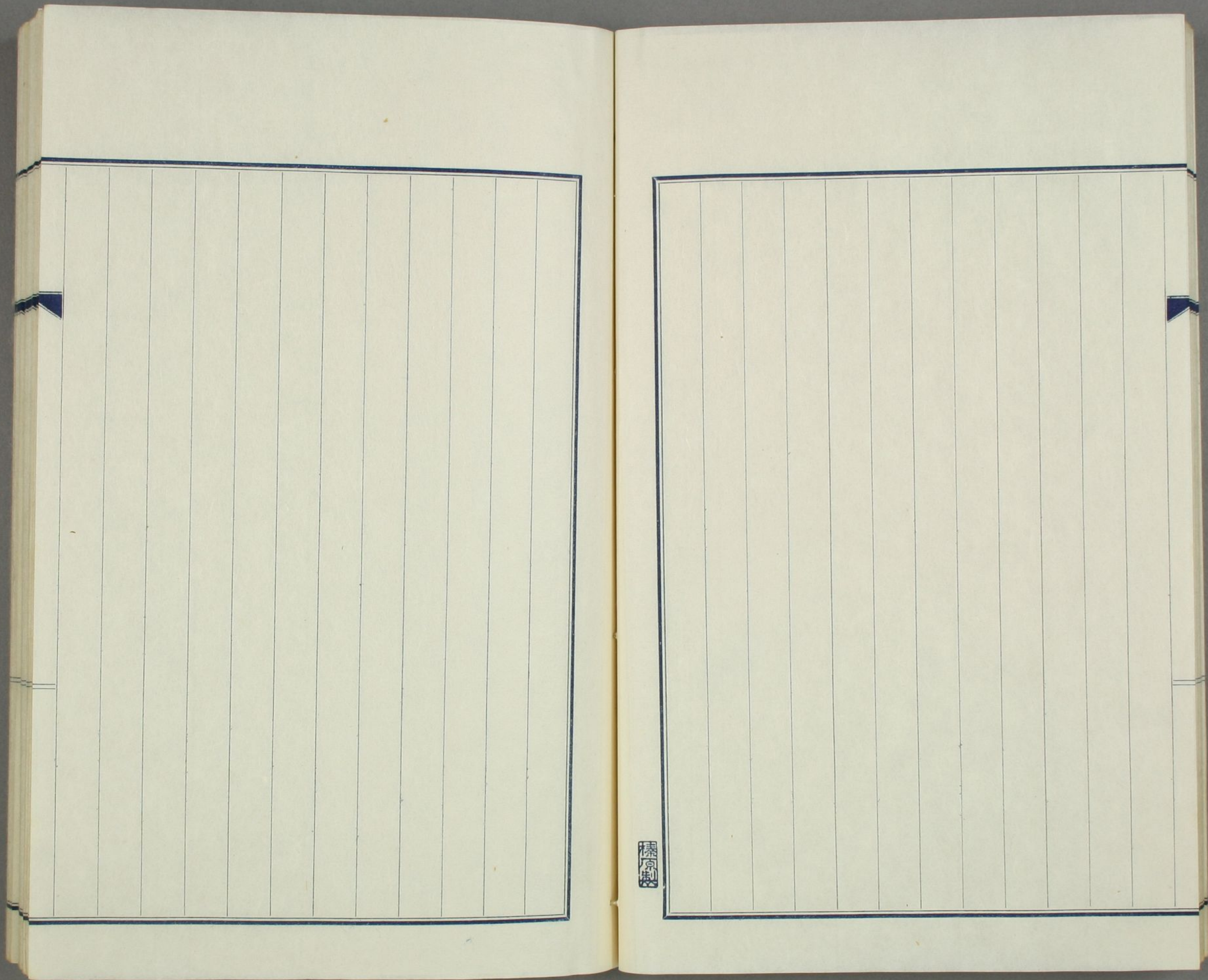
九七、憲法發布式の暗殺

九八、思出した明治噺

九九、明治時代の夕立

百、著者の住んでみた町

八月十三日記



張

「相根漫筆」

石根の環翠橋と伊存春寂庵の詩八行に「うらとせとある中に勝驪

山の三言と詩をみればいふ事、勝驪山と名つけたり誰んかと思つて

ふると伊湖山がより名を解説し、大なる敷面が道路と掲げし

ある事、えを讀んば其来歴を知り、昔は伊湖門か朱舞の

を伴ふて函嶽と遊んじ時、貴門の塔の浮の早急も、支那の何ん

に似たりやと問へば、勝驪山も優ると是れをいふ、内事塔の浮

と勝驪山の名、^か勝驪山、^や勝驪山、^つ勝驪山、^と勝驪山、^七勝驪山、^書勝驪山、^あ勝驪山

うとふが、今が如くも、いふに。

上海華堂厚記製

上海華堂厚記製

後漢書に豊城に於て繁天に於て干将莫邪の劍が地
に埋れし故にとある。余の先師星野博士も亦豊城に宮し
たり。次師と豊城と自ら命ず。余は年其故を問ふ。先生曰く
外城豊城と言はる。余の如き名劍の四舎に埋れしと云
ふも干将莫邪の名劍の埋没しあると一般に自負を誇
ふ事と爲す。余も干将莫邪の劍の名劍と云ふ事
●この鍛え支那の産物なり。必ずしも劍の産地龍文の大河
の河に於ては依を後必始めて知り。尚豊城に於て後莫邪

の内はあり

吾郷に於ては、鮭を産す。佐濱川の漁するものも亦上とす。
郷人好む。鮭を食ふ。生を食ふ。亦味美なり。頭部は玲瓏
透ぬり。鮭の身を割て。鮭とす。味あり。是れを
ひづる。鮭とす。而してひづる。鮭のこころ。湯に煮る。考ひ
て。その料理法を讀み。鮭のひづると氷頭と書く
べきも。鮭の身を透ぬり。鮭の身を煮て。氷の如し。氷頭
の二字。あり。鮭の

上海華堂厚記製

余亦如く函館に遊び利々冬日熱しと敢て春を乞ふが今次の
行季也を伴ふ。山類にもり葦湖の鏡の如く辰開きを見ふ。
女舟遊を罷す、山に物遊船の波あり、そとん仕掛るを船
体美し、即ち海あり任かせし乗る、湖底といふ不まむ約三千分間
を費す、此の時天より波の揚る、山嶽時々現はし時、白雲
日鎖る、湖内園五里を東、江山の嶺の漢画のこころ夏
時の趣説にたもたえ余舟中一甲故年前のことと憶
ひ起す、帝大なるありし時代、金山橋^{上九華堂記製}と四十日の旅の

をきく時、箱根の七湯も跋渉の後湖畔の茶店に、回窓
三和親木の遊遊し、女の勸ちるを任せし舟遊を試み、余等
二人湖底を遊る、三和と別れ上陸其秋姚ヶ湯に宿し、翌
日奥州富嶽より始む、今思ふハ一場の夢、三和富山
日二友、^{鬼籍の上りて}遊き、既久し、余も尚天壽を保るも今
日の遊を為す、舟中一往もを這懐し、感慨無きとも
たも也

上九華堂厚記製

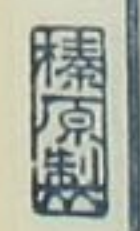
○余の読書に今と云ふ一冊がある。美い多くの中
等致科書を探してある。ゲーテの言ふれやうに
今と云ふ瞬間は有力の神である。米田のハニチシ
トンは自分のやうに思ふの今日である。今日
の價值を知らぬことをぬ、美が自分の生涯の
憲法と云ふてゐる。二宮尊徳「北秋の雨か気
分知らぬを」今日の勤の山草を取ること
云ふは、今を重んずる。教訓がある。北条のこ
と書き、浅くはから、こゝに書きつけると
〇函根に遊覧中の起所、無聊を慰すに、西洋
男せ服状の羨望を湧かす。あるとある感ずる
の、男子の服が保守的であるの比較へは、女装に

ゆゑに近歩的である。婦人の男子よりも装飾を好むから、自然装飾物を身体に纏ふのは自然の傾向である。時代の西洋婦人の団を見るに、莫か、擴かつた袴を着けたり、日莫か、襪を多く引さづつたりして、男女が打ち揃してダンスをする時をい、その仕末に因つて男子の三層に掛けたりこれことすらあると云ふれば、装飾を厭するところも、ゆる服壯心の出来のゆゑ、一あると云ふんが、是れが何人の原因から今日の如き装飾の衰へたか、是れ自分から云ふべきか、或は三四年の流考から衰へた、或は輕装と云ふので、後にあるとき擴かつた袴を着け、婦人を總體で見ると、これが出来たりするのゆゑ。寒暑を依つて服の地を

差がある。大抵婦人の極めを重くいふのを著してある。胸迄や腰に多く露出しては、脚部はストッキングを穿つてあるが、是れをさらけ出さんとスカートを短く、カウチも二重にする。男子のやうな革のベルトやツボンのつりも、用へるむちも。随つて太陽の光線、紫外線などが容れ易く婦人の肉体に接觸する。空氣も自在に通つて男子の如く汗を多くかかず、必要の儘に衣を着る。男子の如く湿度を減らし、衛生上から見ると、装飾の減少は進歩してあるのゆゑ、男子の如く云ふと、全身を衣服で壓迫して、その衣服が重く、重い、太陽の光線、全く

遮りてんて、暑い熱帯の衣服の考めは包帯をてんて
汗腺は、うすく働き、常に湿氣を受けしめる
もの上、ベルトや、ブーツのつくりが束縛してあるもの
不衛生な女装と比して、新しい家庭のあるもの、一向に
を顧みない、何故であらうか、外國の女権論者の
男子の被服権を述べて、そして女子も男装をせよめ
ると叫ぶ人々があるが、男装を、男子の特権といふ
寧ろ時勢後進のこころか、一革命を要する、
ことゝ氣がつかぬものがある。マスケートの洋装は、
右の如き記号がある

婦人の服が男子の服と根本的に違ふやうなものは、
の、美らな、
つ、二、三、十



年前からのきこえ、
な、
ハ、
オ、
服、
く、
斤、
少、
位、
前、
大、
毛、

肉團の温かさと温氣が充ち足り、その上空氣の流れが
ゆるやかにゆるやかに、これに不調をよめて外氣の温か
が二倍より三倍以上あるが、男子の身体は体温を自然
の程に保つのに困難を感ずるが、

又肉團の程より更に実験をやつて見れば、現下の男壯が衛生
上危険であるとして男子の服装を改革することを告ぐてお
る。

○此頃急ニ古拙ニ城後の友人高橋義彦花岳を
三千山投して引取ることなるの事。既に金ハ込つたが
現下の東京に着て見ると、二三日間ある。今ハ
唯ハ頭腦を味つて函嶺の徳然と熱あるのみである。
自分引取車

任巻と名家書巻の三類がある。此の三類の内名家
書巻は往年自分ハ蒐集し、此より名家の印譜
がある。高橋家ハ双鱼巻物と云つてある。これハ
十巻程もあつて、古文書の類ハ混してある。
古文書部類も自分ハ世流として故人に買はせられ
もいくつある。先ハ譯ハ此等三類の圖
書の自分ハ因縁がある。先ハ譯ハ此等三類の圖
書ハ時書格と親族関係のある。白熱春ニ、此の
ハ二宮春明ハ全部引取ることなるが、此の或
る部分ハ引取るか、此の或る部分ハ印譜の

二款であると言ふ。荒し全部二巻：片付たるの時よりい
うすんハよいかと●河が事此いん。自合の安田長次中
のこを思ひ出して、安田長次を古文者、引元も
知ぬと云ふは、女を考へて元て何人の考へた義侠的
自分自身引元らうかと思つた。安田長次といふ書
店の主と共に二巻を河河する途中、内書を書き
こまけて、ゆゑすると、二巻は全部引元の意を、僅か
に印清印歌を引元つたとの報告を得たけんとも他の
ころ、就して、折角^{白熱}の内書を教してあるの
に何とも申儀がさういので、自分も不快な感一、二巻は價
値の減額を申して、引元り、自分の書も名家の附し
に價が引元るといふのは、情をわけさう、何故かあるら



かと、高きをぬぐへる白熱もやつて見ると漸やく決し
のふ遂い、味方のことである。兎角地方の人のイザとさ
と賣却を躊躇したり、値切らぬ買うといふと、頗る
高値を賣らうと推量して、高揚し、風がある。
さういふもの、ジグザク折角、回合に賣らうといふ
さう、殊に不景氣の折柄にもある。高直の此道、由
人であるが、利産自合の、捌きかつぬと初めから、兎を
ぬぐひぬ位だ。
兎に角不景氣を予入するまゝ、運入は、價は古文
書一千圓に巻七の四、双巻を言、巻千三百圓と
いふ値がある。自分の長い河書物道楽をやつて、一
年三千圓のよを買つたといふ、これが始である。早大

から今までの歴史を贈るに於て陰に借る事せず
支拂か出来ればある。自今の子友の記念とするの如く
か早大●思案の記念として後バツル。

目録を以て置かざるは其の書名も数量も知らざるが全
部百数十部ともそのへきよみである。故に歴史と教味
かあつたのと史料のよき者と思ふるよみかあつたのか、是
等と相俟して蒐集し、此から古文書の可なり精選
してある。経巻もさうくよみよき書物が塗金の経巻に
一杯に入つてゐた。是の如きもの乳任や中尊寺任もあ
りて字任が版任の二ツ七文にて長くぬ、双魚書もあ
り、自分の田舎もあるから、凡そ思ひつくか、是も修りぬ
か多いから、閑に任して記帳から呼び起して見て七十

標

黙住一か、頭入浮んが来まひの、試みよ又目を挙げこ

一千陰書(文) 大巻物

この千陰の家から出たよみよき千陰のよ
書や書簡らどの類む其家と存する
よよと、子孫か下、字に字をセ集め
よよかある

一 梁公の書巻 一卷

この梁公の領内と布令を出した
自筆の稿本とよ見るべしよよか
聊、子塗抹のよか、よよか
よよか

一 高山彦九郎の徳助湖 一卷

中山書九冊が身延山に登つた際の日記
で芝田の石宏平とて偽り交けよと云ふが
自分より平は拙しと云ふ。別には行程の
間から出たものも見ても貼り込んじある

一 林家歴代書巻

林家歴代の文を集めるものなる共心し
たことあると云う。二千二三千入ら
るゝものがあるが幸々後改の物平
家の花に悦ぶが補遺と云ふきことか見
あつて是れ刻意をとりて定題と
するにことを得し

一 伊北忠教沿海測量図



この測量の規程が一枚と測量の原書
が一枚ありあつたが、共に伊北の自筆の
いふと物定りぬるが、伊北の長文書
備(書)有(地)味(ま)も(か)り(て)高(標)集(本)平(津)
~~備(書)有(地)味(ま)も(か)り(て)高(標)集(本)平(津)~~
補遺と云ふ書は
女

一 頼山陽書巻 一卷

備前岡山の閑名其を詠ふ頼山陽の
長(日)命(を)山(陽)が(押)書(も)一(は)概(書)の(巻)
ひある

一 具注暦 一卷

この何年のことかあるか今記臨する

一 名家書簡大り巻物

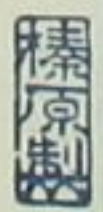
この頃京都大丸下村家にも往年賜る
ものよか、有名な名人書術家の清
息かよく山寺に集めてある多くの書
次のよものである。

一 折言文一卷

昔一折言を主つる千頭明王の鑿印を
捺した折言文用紙目書と極めである
たこの其の標本である

一 死者記念紙

昔一の死者の葬の紙のなる紙の裏
に字紙とを巻を寺に納め、習儀かある



つれえのその一標本である。

一 根来寺に關する文書

仁孝皇朝の紀ある根来寺を敵討つ時の文
書は、珍らしいこと、^{信長}豊後守の著者
の武将の列置してある紙である。曾つて
田中義成に記せられたかあるが、^{信長}信長
のとき、^{信長}えの掛物に表註を記してある
こと、或は文書の部に入つてあるものか。

此位一か考が深かぬ、何ん様手の上は保存法もあまねく
よくわらうとてある文書類の救済記を後か
ら、家持の紙や文書や書物もその部には合せん

日録を編成して後、いさゝか、いんさ仕事、七錯夏の一法、ふせ
るる。

自今、多く集めて多く散じ、今日目利、いさゝか、後、無い。任
巻、か、小麻、任、天平の元、興寺、任、致、任、か、文祿、任、宋洲
日書、の、山家、任、本法、任、八卷、長頭丸の納、任、白鳳、任、の
復、本、本、本、とい、あ、橋、本、と、重、復、し、る、か、ら、全、て、一、類
と、す、べ、き、い、あ、ら、う。古、文、書、の、い、は、れ、松、尾、任、細、川、任、忠、息、任、一、任
馬、字、の、印、あ、ら、う。天、海、任、和、為、の、尺、牘、忠、信、任、書、状、任、の、書、
通、き、ぬ。早、大、の、古、文、書、一、卷、の、復、本、あ、ら、う。い、は、れ、三、任、法、華、任、の、書、
て、置、く、べ、き、い、あ、ら、う。名、家、の、書、を、い、可、う、多、く、あ、ら、う。
か、ら、あ、ら、う。記、さ、ら、う。元、二、角、北、の、収、獲、を、さ、ら、う。い、は、れ、
序、七、い、く、ら、海、邊、を、得、て、お、る、樂、あ、ら、う。こと、あ、ら、う。い、は、れ、
序、七、い、く、ら、海、邊、を、得、て、お、る、樂、あ、ら、う。こと、あ、ら、う。い、は、れ、



ま七

昭和六年八月十三日行徳山領記

○物書、後、花、書、日、録、就、て、納、り、て、見、る、と、家、卷、の、古、
任、左、の、如、く、約、二十、點、程、あ、ら、う。収、本、七、多、く、交、り、
あ、ら、う。復、本、あ、ら、う。あ、ら、う。

法華經音訓 成徳三年 (撰本)

○法華云義序 文祿四年 流本

百卷塔陀羅尼十種 後利を復本

白鳳任金剛坊陀羅尼 影本

○元興寺大乘流轉任 元興寺在判

○貞観十三年小麻任一巻

○長頭丸献法華任 宋版覆刻

○宋洲校勘山家本法善任 八冊 宗洲自書

古方經一行帖

東江源麟書普門品

酒井抱一書普門品 校本

宋徽宗鏡錄 校本

法華安樂行品 張即之書鈔摹 宗廟校勘本

豆本銅版法華經八

燉煌出土十誦比丘尼波羅提木叉戒本 校本

西苑經 四枚

貝葉經 三枚

飛省酒經 原本兼覆本

家為自字象字經

豆本胎內經一卷

標原

毛禱丹綠温温集图像

菱湖宮住刻板揃

大魏天平二年像并銘拓本

威奈御墓法拓本一卷

双鱼笈上書卷之一類 目錄二八五八七九八〇一〇一〇二一〇三

類七

古傳拾遺 影本一卷

日本記才十一卷 零本一卷

古本石神化殘瀾

右五書前田家本覆和京

川路聖謨詠草 一卷

山縣有朋存存年 一卷

函東村方唐詩書卷

小中村清短迎卷記

前山鴻爪江戶遷都建議一卷

福地振痴俳句批評長河一卷

晚宿群育獎樂卷

樞四半古花鳥橫卷

估久河象山樓言仲氏易序跋二卷

秋月經附口上一卷

瓦○改就画六先仙

支那田憲秘載回卷

尚余素庵隱政沈久世舞下卷

露山山本九舞蘭亭回卷

上田無陽天保九章書卷

標原

杉聽雨大抄卷

香草向小路請幅二

野迹影本二卷 小卷

岱海別書白雪翁墓石橫卷

及呈筆書鷄血石歌一卷

繼志園記一卷

卷菱湖古葛館記一卷

山陽批板并角山詩文稿

山陽題詩了友齋山記一卷

山陽詩文影本一卷

山陽西省帖一卷

雜覽九歌圖 海嶺陳天連

冷泉為泰公事十二月一卷

六部方本皇侃礼记義疏影本

夫子道德經の問

波の巻一卷

五才人遺墨

杉田玄伯銅版肖像和歌由業白紙

服部南郭各体書帖

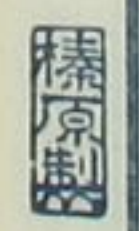
若宮墨妙

秋山陽書の扇面竹田心伝歌

秋山陽書の文印略叙(数面)

八田心伝の歌集一卷

煙浦此合戦圖巻



全苗河書二巻

蘇溪粉本一卷

任内直造一休禪師草稿一卷

藏本御養源銘本一卷(重本)

野迹前田本白岳易詩一卷

大須本康代君臣詩巻

任内内記平次物語一部影本一卷

名家書簡數十巻あるも別二類と為すか如く此内

八巻入る

八月十五日記

此後一七三ノ般の日記を他つて凡そ思ひ出すの

ハ當り花と友人山川間高に割愛しつる

白鳳任本石川年運の大畝是六巻田中納

言の字一はる家古物未の拾得三巻を今花
しむべしと死か死の年と算すことく
い出せども真に無用のもの今存すこと十
の七八は子精物也

日函炭の物書後朝宮治引元品三天
函外に柳合李一個班自包動車と後んか未着取り
取らず包をゆけし数換米徳計百上餘中
掛物とるうと長このも少からず遊日換の序に
數を分けて整理すうとく數多く一の玩
の暇とるも先づ余心花の所謂の双魚書物と
換すも徳計四十数あり七文書と房するもの



十荒干あり、自分か函炭を在りて記帳を
も僅うと干計りしう奉げ得し他の
三十餘の左の四目六の如きものあり

近代若公書卷

近衛藤生院草書卷

若宮院書卷

林外山人詩書并物去未印簿

梅逸園文集

東野續古今集卷

四大家詩書 那波活不九三家

仁方父子書卷

上田秋成和歌 精亭題字

近衛应山公五色摺纸卷

林東舟造墨

高玄岱父子書卷

文晁和唐其筆法卷

大隈言道和歌卷 枝然集

荻翁松園二卷 内一古簡

加茂真淵加筆詠卷二卷

八見井洞書卷

中津雪城二件千文 二卷

杉崎暢堂書卷千文 臨懷素

華山橋山以外稿卷

僧如春山の粉本



五家尺牘 但徒唐海舟

黄蘗高公書卷

慶應公書簡 文乃風呈安其

菱本時代能書集卷

近代名匠書卷

後光寺院留思卷

百井映堂父子文章一卷

細川出舟田手紙中文書

此書二十卷、今々忘却して記憶の上らざりし事
多し一説は八皆是くありてそのるるを小半の面
白からして、そのるるに持主の貫冠りて、此本四十卷
二千三百四の價を附し、その輒り不為と感し、

幸い白雲河の舟時河無き以て一境をさし
しつとて終りまふも及し長くさうしこのあまの
おもしろきことありいこるを漸やく埋め合せの
出来このことを老人にまゝ書畫目六の左の如く
圖註を附しつとてさしこのまゝ

◎ 新井白石長篇詩幅 晴海舟中花

◎ 杉崎陽堂哭山梨福川詩書

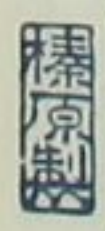
◎ 椿山畫書

◎ 青久隆古海魚圖書

◎ 物部律叔某改字祝

◎ 契沖和歌書

か茂真洲中士詠歌堅幅



第壹お記の又

羅屋主剛例階傳書

杉平栗全畫井伊直弼歌

流三漆画名家影後長書

山中靜逸小品二書

卷美湖書前

の流元勳書前四書

真洲草花の真慶のありと確定せしむるは

しつとて終りまふも及し長くさうしこのあまの

おもしろきことありいこるを漸やく埋め合せの

出来このことを老人にまゝ書畫目六の左の如く

圖註を附しつとてさしこのまゝ

幸い白雲河の舟時河無き以て一境をさし

しつとて終りまふも及し長くさうしこのあまの

おもしろきことありいこるを漸やく埋め合せの

出来このことを老人にまゝ書畫目六の左の如く

圖註を附しつとてさしこのまゝ

の自署あり、形迹もあらず、他一二巻にてもあるを、何と云ふ
極にその感かたき其の総目左の如し

大乗無量壽經

弘明集 法隆寺一切經 卷八

大方廣佛華嚴經卷之二

達一大毗波沙論卷之七十四 尊氏自署

天平神呪經 光仁皇后乳經竹快源

大方廣佛華嚴經 春日政

大般若波羅蜜經多經 二七十四 藤原氏代

付家金泥像本致經

安倍小水磨般若經

法華經才一付紙金泥經 中尊寺



古往卷提經

方等王經 虚空花所開

此内無量壽經尊氏自署、小水磨經、皆余が舊
卷の古橋に割愛し、その也

引之品中、最古量書、古文書部、未見一々

此於その取、ある、此部、余が割愛

し、その十数、ある、園、と目、その附、その

か、多、ある。

杯、永、縁、心、前、田、徳、の、前、院、片、尾、石、の、外、状、合装 一幅

今、津、大、藏、前、生、氏、御、小、讀 四上

、仙、台、黄、門、正、字、杉、隆、奥、守、浦、息 四上

上、行、通、信、書、状、及、名、文 四上

北條時益下知状

一幅

丹波回返隙

丹波守藤原忠文署名

口

赤松則祐書状

行天竺題蓮

口

高藤文之上人文

弓仲極

口

、御つとめ衆御書

右宿直文書

一卷

兵庫北園納合

三枚継古筆

二卷

西園寺公衡公消息

三枚継古筆

一卷

三好義継短冊台張

歌切前田香雪繼定

一幅

西行法師真蹟

歌切前田香雪繼定

一幅

奉定進法壽堂水田

大田二年六月二日大政官牒

一卷

大田二年六月二日大政官牒

元其又三年七月廿七日大田御田券

一枚

元其又三年七月廿七日大田御田券

一枚



延喜五年十月六日田賣券

一枚

信玄より安樂織刀祓取

奉定進法壽堂水田

土御門康房の筆

大和矢田、頭方

、尊守起

一卷

所領等

、南朝文書

、東大寺八幡文書

一卷

、安永補任状

一卷

、東大寺関係書

天長四年十一月

應永十一年十月廿日古文書

東寺関係古文書十九卷

、天正二年根来寺文書 佐長の將列第一幅

、古文書大板

、細川出方田色紙文書

大日齋二種定

、月井順孝父子文書

此内若干双魚部数より此部は補へり

外、巻詩圖集古文書

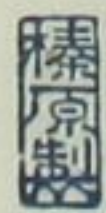
一巻あり

以上引元品を點検すると百餘程の内約半數は皆

余の舊花より、敢て舊主の復すことを切せり

——との分度り来りたるものと謂ふべき歟

百卷一冊の大収獲花の計り、困る仕あり



今相来共直を忍人の難幅の書架を救心理し漸
やく横卷四五十と蘇志三個の若と合志の文
書幅の復り、其母納り入る進々成る至り
五分と為す美也

此引元の大収獲と云く、定々悉く以簡便と
云ふ可なり、及故と致味とす、方から云く、其集り

子集り、その集り、領の決りも貴からざるものなり

殊々余が為集の横卷の眼目を多く失ひたること

も心へきなり、當りて探道公東海道其他旅中、スケツ

ケ一巻小卷三本、敷山陽守稿、山陽加年、の文稿若

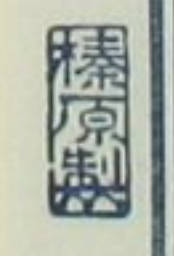
田在湯詠歌、文詮、謄書、蓋殿書、百依、石川侃者の

山所横卷と云く、此の類、中々、置きたる珍物のもの

多し、か、えん、等、の、皆、無、し、亦、橋、が、敷、く、行、く、人、あ、ら、ま、
較、の、價、目、高、き、が、故、に、買、つ、て、書、畫、を、家、分、し、た、時、
引、離、ち、て、賣、却、し、た、と、見、く、な、る。四、十、卷、の、書、畫、
横、卷、樂、の、糶、粉、の、多、き、日、久、し、し、た、う、

斯、の、レ、グ、キ、世、間、受、け、の、事、を、し、他、日、亦、橋、に、做、
あ、る、長、印、の、日、余、の、如、き、義、侯、の、友、人、あ、つ、て、二、年、之、を、
辨、め、や、甚、に、怪、し、し、
昭和六年八月十日記

五、并、に、満、ち、旅、幅、旅、客、院、に、お、こ、満、ち、た、納、戸、に、
受、く、れ、お、も、ち、り、り、て、さ、う、く、面、倒、を、感、す、
つ、く、し、思、ふ、所、三、千、田、一、畝、三、十、田、の、物、を、
花、を、ん、と、一、畝、三、千、田、の、よ、の、を、花、を、ん、と、
と、一、天、す、



○長、唄、の、江、戸、特、有、の、もの、が、あ、る、か、い、思、つ、て、お、れ、が、こ、ん、ち、
上、方、か、を、家、に、あ、り、太、い、河、上、方、の、と、区、別、す、る、為、に、
江、戸、長、唄、と、稱、せ、ん、て、お、れ、も、ん、が、江、戸、と、大、い、に、
違、へ、ら、れ、か、遂、に、上、方、の、株、を、奪、ひ、今、は、長、唄、と、
言、へ、ば、江、戸、に、限、ら、れ、る、う、ら、な、上、方、の、長、唄、と、音、
法、の、指、導、す、る、太、い、小、唄、を、い、く、つ、も、組、合、せ、ら、れ、
の、び、一、身、一、心、の、味、に、無、つ、た、見、る、に、單、調、な、よ、め、が、
太、く、横、く、竹、苦、が、さ、さ、江、戸、の、教、味、に、投、ず、る、や、う、に、
長、義、あ、る、内、容、も、あ、つ、や、う、な、ら、ん、と、い、ひ、が、今、日、の、
長、唄、に、あ、る。長、唄、の、名、義、端、唄、に、お、れ、と、云、ふ、の、は、
上、方、に、長、唄、の、出、来、た、ら、ハ、ウ、キ、リ、か、ら、る、か、元、禄、
十、六、年、刊、の、松、の、葉、と、い、段、に、元、へ、と、お、る。或、は、え、ん、と、

も早く出来しぬれぬらんまゝ。江戸に初めて江戸長
唄と銘を打つれり。あつたのうえ縁の次きぬお泉が
次と云ふんてぬる。江戸に心こゝんと芝居に用へば
からウツしくも遠くして僅に二十年ばかり後の享
保十二年のいも江戶の冠を除きぬるゝあつた
本家本元の上つて。江戸の奪ひぬるゝ任かせを維
持しぬるゝも一もつた。と云ふのいも。次は
遠の俳優もひとと卑下しぬるゝ芝居に用へら
るゝ。長唄のうゝ友と抱きぬるゝ任かせの
び上方のいも長唄のいも。各所ぬるゝ三下
りの唄に上りの唄本浦子の唄と云ふて。浦子ぬるゝお
うゝやうぬるゝ。

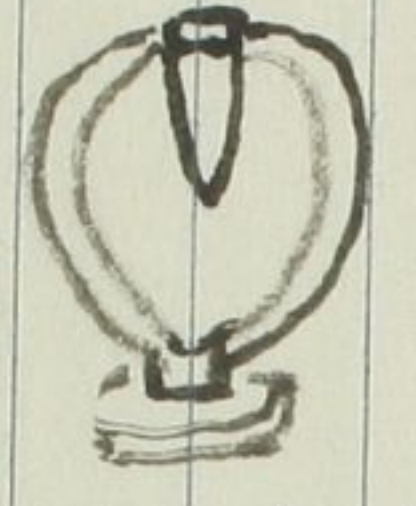


○幾回も又困ぬらんて為すこと。ちやうど寝ころんだるゝ。妻
酒もあつたつらつらつと一日を暮らす。此今野の無
聊と慰めん。流石の先から玩具も実で十牛の友人
かあつたつらつらつらつ。今つた骨董商か。小品を高く
して来たり。西のうゝ。居かぬボツく。小品か。千入
る。例もつらつらつ。又書き。記しぬるゝ。厨子入の
塗金佛の乾隆元年の刻銘があつた。厨子も古雅
な家花の十数ある。厨子の形式が異つてぬるゝ。の
厨子の架上のいも。非特平の香燵形。心つた
小品の中。銀の線香をまて。いもが特つた。あるの
御家の漆物も。あつた。いも。架中のいも。いも。
偶々大長。佛像研究をせぬ。いも。今津ハ。

佐輪の模を二個定めて来た。畝傍の陵の附の
 びりまつしみるもの、畝傍焼と云ふてあるが流
 石に大お良の擬古流石術の傳のをみる。二体の一を
 兜と書いてある男性の他の一は女性に似て後
 しぬま。斯の形のよを飾りともみる。よく見ると但
 頭は流石である。實に妙なるもの。習俗を現はし
 る。折節今田宮原が中心を推して来た。その内は
 鏡がそみ取りの、まは銅鐸の形どつたので、よい意匠
 と考へてまを焼くと共に、形も焼く。こんなもの
 の中心である。序に書き記せば此頃、山陰に獲れた
 の重助人形を、双の所謂の農氏藝術と見ると
 きのいふ、こんなものが、湯本細工と交る来た



ことが従来の有輪のたまの形の型を破
 つてよいこと。思つた、高は崎形の花器も品を得れば
 形は、如斯く中央に垂下してあるもの、おを入
 り得る。かゝる一輪生と云ふべきであらう。か支
 那流の銅鐸と云ふもの、焼物と思ふのが、こんな研究
 も要する。



八月廿〇日記

○思般由有本、余の家、舊流石と云ふて、流石
 の上、頭肉を、大の細紋がある。唐の、栗原貞乗
 の刺繍があり、見れば、心若り、来歴が知らん
 うつた所、やつと長崎の人、廿九歳志を、身と、江
 り出で、整正の、つら、後、つら、此の人、中の、花子

といふ人があることか知んぬ。
 ○此今人氣を傷してある映画は「間諜X・27」
 と云ふ女探偵が探偵の為め流転して敵軍にあり
 る露西の申言探偵と恋する女と互ひに探
 偵することを知りつゝ、恋を懐け、いん産を
 成つて敵軍の探偵と恋するの為め、悲劇
 的のも、俺んが甘んじし銃殺さうと云ふ悲劇
 的なる、女は、間諜に使用され、心えさうの
 動力を、恋する関係の破るのひある、こゝ
 ちりの一例として上映さん、八月廿一日

標原製



間諜 X・27

原題 (DISHONORED) バラマウント西部撮影所製作。ヨゼフ・フォン・
 スタッフ原作並に監督。ダニエル・ルービン脚色。リー・ガームス編
 影。内田敏三雄鶴譯。一九三三年四月四日米國市場發賣。

配 演 X・27
 マルレネ・テイトリツヒ
 コウリン大佐 ヴイクタ・マククラッレン
 フォン・ヒンドウ大佐 リ・ユ・ウ・コ・デ
 若き中尉 ワリーナー・オーランド
 大佐 イ・ノ・ト

梗概 世界大戦が始つてから二年、一九一五年の秋。
 ウィーンの裏街には幾多の賣笑婦達が崩れ行く祖國を眺め乍ら、淋
 しく目を送つてゐた。その中から、強く祖國を愛する一人の女が時
 埃太利秘密探偵局長に拾ひ上げられた。そして間諜X・27號として
 彼女の名は陸軍機密書類の奥深く記録されたのである。
 假裝舞踏會の一夜、X・27號の任務の事は、賣國奴ヒンダウ大佐
 に近づいて、其の夜の中に彼を自殺させて了つた。
 その直後、彼女の手は埃太利將校の假面を被た敵國ロシアのスパイ
 クラノッの身邊にのびていつた。けれど、お互にスパイである事を知
 り乍ら、二人は熱烈な戀におちてしまつた。
 その戀の未だ日淺くして、彼は逃れてロシアに歸り、續いて重大な
 任務を帯びたX・27號が豪雨のうちに飛行機によつてロシアに潜入
 した。
 數日の後、X・27號は國境近きロシアの將校宿舎に下女として住



み込んでゐた。早くもコッリン大佐を掌中のものとし、秘密書類を樂譜に寫した。ところがその時階下でクラノウはX・27號秘藏の黒猫を見出した。捕へられた彼女。クラノウは流石に樂譜を覗むだが、音樂の知識のない彼は之を理解し得なかつた。そしてX・27號が銃殺される迄、せめて奇しくも短かつた自分達の戀の最後の時を過さうとクラノウは考へたのであつた。けれど不覺にも彼はX・27號に魔酔劑をかゞされ彼女を取逃してしまつた。

翌日クラノウによつて破られた樂譜を想ひ出すべく、X・27號はオーストリー司令部で最高幹部にとりかこまれてピアノの鍵盤をたいてゐた。

その翌朝五千のロシア軍がオーストリー軍に捕へられた。その中にクラノウが居た。彼は深く身分を隠してゐたがオーストリーの一兵士は彼こそロシア秘密探偵局長だと主張して止なかつた。

遂に翌朝彼は銃殺される事になつた。X・27は自ら取調べを申出でクラノウを獄舎に訪れた。そして故意にピストルを落しクラノウを逃して了つた。

軍法會議の結果、X・27號は銃殺の刑に處さるべきを宣告された。すでに冬の晩であつた。彼女は僧侶の申出に答へて、ウインの裏街にゐた時の服装で刑につきたき旨を答へた。そして狂ひのないピアノを望むた。

白雪を踏んで、刑場に既に兵士がならむた。X・27號の獄舎からは、高く「ゲニエリッパの謎」が響いてきた。

やがて出迎へに來た若き士官。彼はX・27號が始めて秘密探偵局を訪れた時案内した中尉であつた。位置についてX・27號に彼は黒の目隠しを出した。X・27號はそれを靜にふつて若い士官の頬につたふ涙を拭てやつた。

急激の如く鳴る太鼓、僧侶の手に抱かれた黒猫は一瞬銃聲の赴く果を見た。そこにはX・27號が短くも、波瀾多き人生を、餘りにも痛しく終つた惨骸があつた。

の如き少人の短命の如き、或る好も家が自己の
 の倒壊し、其の虚脱の如き、手帳に印して美をま
 びあつと云ふ也、或る助があつたやうに記憶し、
 此のやうな言近を何から得たよ、自分からエ
 ン、何んかあるのを、藤原の如き、美んか、
 其れ満了、藤原のやりをうることある。百人の如
 北して美を誇りとするよ、自然に藤原が無んバ
 る、或る言、百言、藤原を、美よ、藤原が好も知れ
 りをうること、藤原の如き、其下、何んか何ん
 何某と云き入ることを、藤原、元禄頃の藤原の
 世界、其事、實あつたよ、何んか、或る西、
 其の業、そのつて、何んか、何んか、何んか、

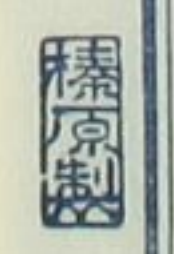
接吻すゝか、そのお習儀のうい我邦、控へ、唇語を
心る、雨の風と云く得る。自分い大段む或る
又、藝家、序、し、時、お、唇語のういを言ひ
出し、そつと敷衍し、雨あつた小説か、未、う、
そのことか、あ、が、九月、那、の、文藝、部、を
俣、り、し、し、と、滑、り、し、後、人、び、行、く、と、こ、ん、野、村
胡、を、の、ま、い、れ、百、唇、の、語、と、ま、一、つ、向、の、お、説、が
あ、る、こ、ん、恐、く、お、ま、の、エ、風、を、務、り、し、よ、あ、ま
お、ま、の、い、お、初、の、志、と、後、り、れ、女、が、男、い、あ、ら、ん、
懐、懐、の、語、り、危、こ、う、う、の、ま、う、し、の、ま、の、を、薄、情
男、い、前、に、別、れ、し、れ、び、あ、る、こ、と、心、付、か、お、九、十、九
人、の、お、唇、を、手、帳、に、印、し、れ、其、の、お、後、に、此、危、を

藤原製

扱、め、唇、印、を、未、め、ま、お、人、び、若、し、振、り、舞、上、り、
男、心、あ、る、こ、と、か、今、り、判、力、を、次、つ、る、男、の、喉、を、持、し
ま、い、血、を、紅、に、代、へ、て、唇、に、貼、し、し、お、後、の、唇、印、を
捺、し、れ、と、ま、お、脚、毛、と、う、ろ、を、お、り、の、お、自分、か、十、年
七、前、に、お、説、家、に、お、あ、ま、を、お、め、れ、の、か、お、め、を、お、
ま、つ、て、現、い、ん、れ、と、一、笑、し、れ、
八月、林、音、記
〇、一、句、而、ま、く、残、る、燈、か、如、く、つ、く、し、閉、じ、也
定、朝、お、際、沿、ま、く、降、る、雨、を、呪、め、る、歌、ハ
時、ま、う、過、く、ん、ん、民、の、恨、あ、る、う、八、大、歌、王
西、や、め、れ、ま、
と、あ、る、お、い、ま、の、及、昔、の、お、歌、か、お、
序、ま、お、い、の、お、歌、一、二、書、き、つ、つ、の、

利のちつこ位のやつこ多き世にわんわん身
 のある下らうりやうり
 人に世の平ふらうりぬわら胸こしは
 くさむ山あひる の上
 夏の月蚊を産くこ五るる 其角
 庭の面いささか乾ぬぬ夕主のわんわんけ
 く沈める月かゝる 糸文
 形ふきもあひるぬ山の奥にさく住まが住
 るいよのふをあひる
 涼しやや鐘ををるる 鐘の初う 其お

○往年回書級悔人の何人と満構旅行を以て際ひ



美の米本後長七行中もあひる、まんか今と云う
 ても記念の考の何うあ時の思出をまひて其れと何
 を定り就したる也、書くことと困りぬ、漸やく杜甫の
 句を思ひ出さる、まんを考きつげり其れを寒い
 月の句

山崎谷壟依地在、新吐強春畫に主

○鏢金の炎熱む、堪難い氣節が、夾竹棍の草
 成突れ開いて太陽、晴る時、我が家園の杜花も今が
 満開に、離れと見えると百日紅がある、又、百日紅
 と花も大きく紅色七流房である、倍花を花び
 らあふか、えが沙漠のオーストリスに咲き乱れをみる

死にと思ふと、暑熱が猶やまらずやうな気がして、
やゝ感さる

○昔、浪華の箱、廓の娼客と娼婦が格子を
隔て、情を交換する法があった。そのころ、
の箱裂けてホーツキのやうなものを化つて、自分の頬
張つたの娼婦の頬張つたのと交換して口を合
ふことへ行つた。この心づく一種の接吻である。
今のエロとゾロの感ある時代、接吻はいろいろ
く新しい方法が生れて、例の飲料、茶に用ゐる
ストロローパイプもその一端を男女が口
づゝと唾を互いへ交換して悦びつてゐる
の野崎慶太（幻庵）とよふ人の「茶合記」を

書くくわい知らんてゐる人が、自分の交りが無い次
日北人の随筆「らくかき」を讀んで見ると、頼山
陽が「雪舟の碑」を書いたことか書かしてゐると、
んと自分の名か見えへるから、一寸讀んで見ると
山陽先生の著「英研文」熱心な徳村中蔵
峰の「や帝時春城」の著者もか、つてゐる。
やうだがとある。珍しく「これ」の碑の全文が
載つてゐる。碑文は「雪舟の撰」とあるが、著者
は「雪舟の撰」と書いて、**ある**「頼山陽」の著者と
ある。この山陽の流浪時代に、**此**「不名譽の
碑文」があるが、**いん**「いん」の自分か見直すと、
「いん」、**随筆**「頼山陽」の「無論」載つてゐる。

多の碑文の掛幅よりうつてあるのをエロタイの版に
写し比喩をも不刊しとある。山陽のいくら流浪
時代と七名を書きしことを所名の成名を有し
てくれと申込つたに傳くは見えぬが、多の碑文
ハズ主水に存してあるのだ。

の野崎の序に吾等、縁遠い山形井上と云え、
る姓未してみたり。此の地素より南原の性格が委
しく書かれたるのみならず、其の味をもつて見えしを讀
んば、その趣聊と被つた。井上の我侬や府府の存
名のころもあるが、より雪の鳴り松や暮るる工合が委
しく書かれたる。秋衣を着て見えしと見えしこと
や、も創の善公をうけてある。人を譽めたるは

多の碑文の掛幅よりうつてあるのをエロタイの版に
写し比喩をも不刊しとある。山陽のいくら流浪
時代と七名を書きしことを所名の成名を有し
てくれと申込つたに傳くは見えぬが、多の碑文
ハズ主水に存してあるのだ。
の野崎の序に吾等、縁遠い山形井上と云え、
る姓未してみたり。此の地素より南原の性格が委
しく書かれたるのみならず、其の味をもつて見えしを讀
んば、その趣聊と被つた。井上の我侬や府府の存
名のころもあるが、より雪の鳴り松や暮るる工合が委
しく書かれたる。秋衣を着て見えしと見えしこと
や、も創の善公をうけてある。人を譽めたるは

日若月2毛のしやツを着る袷を着用し毛布を
膝2かけし(互)と云ふ塩梅にあつたと云ふ。あ
人の時、和歌を仰するが、御次大寺から御題
を出さん時、御進し、か、陛下の筆をかくら
ぬれ、まゝの右かき、頂戴し、か、陛下も思、而、向
し、今日、頻りと御進を倦、れ、陛下、御倒を
浴、心、せ、か、け、し、も、つ、こ、や、う、に、う、れ、目、の、で、ま、え、か、ら、い
山、好、七、軒、命、の、七、御、進、し、う、の、や、う、ま、う、つ、れ、と、云
ふ、七、御、進、の、記、も、所、に、あ、る。

の野崎の逸草に於ける、移れるのことが書かんとあるの
を元と、あまのう、感、する、こと、に、移、か、井、上、雷、公、と、題
の、歌、も、し、い、友、だ、あ、つ、れ、と、あ、る、あ、の、位、性、格、の、お、お、

し、に、ま、が、無、い、ら、ん、交、り、に、あ、る、よ、う、だ、と、思、つ、れ、移、れ、
ハ、海、邊、の、所、の、久、の、皇、太、后、の、御、大、夫、び、あ、つ、れ、時
いろ、く、の、久、菜、が、あ、つ、れ、と、野、崎、の、移、れ、る、と、云、
く、か、ま、く、を、移、し、て、あ、る、鐘、文、の、行、啓、に、お、供、を、
し、時

鐘文の政子、静の古歌を、山の腰、子穴の歌、
と、や、つ、れ、世、官、達、を、笑、ひ、せ、る、と、ま、ん、が、皇、太、后、陛下
の、御、進、し、入、つ、れ、何、を、而、向、く、笑、つ、れ、あ、つ、れ、か、と、の、仰
で、表、地、の、喜、の、世、官、が、ま、り、狂、歌、を、御、進、し、入、ん
れ、の、山、好、七、軒、命、の、七、御、進、の、御、用、御、お、供、し、れ、
時、も、久、敷、し、れ、と、移、る、と、ま、く、と、泥、津、の、御、進、車、坊
を、降、り、て、お、供、の、刃、長、を、持、つ、と、あ、る、と、雀、の、や、つ、め

かたもおちちてうん、世の家根の庇の先で、雄の
やつめか雄の北目の上り下りつておれ。そんをそ
い美しい世に世を柳拾ま命、あんを元と云ふと
女官連の皆視察をそんに集めれ、まこが皆く
笑ふのそまことしく、陛下の御注意を惹き、何を
笑ふかとお問ひあつたのむ女官連もお答へて困
んといどうか移えおれぬおれ、まこが皆く
のむ移もいどく困つて、何いや在の婚禮を見
せんとて、お茶を濁せんとあ
つか移、道に人びあつた。

○吾輩後、越の雪と名くる茶菓子あり、菓子
通に全回の干菓子と品評して之んとす。



まじり而してその、いつの刻めたるやと、いふに
野崎幻庵の泡華加賀の錢屋五兵衛お世
の貿易の條に、五兵衛中時許多の船末糖
（今の棒砂糖）を所買し、後、越き菓子高
と名謀り、一程の菓子をお世に名け、紙の
書とす、とんぬり外人を買取らし、糖の
と、いふ異字に属し、とも名づく、紙におく
の辨吹英二（茶唐）の自合文あり、ある人か、お近年
河の一、大いあつた、茶人の法名を日氣豊院と云
ふ、こい、わのそり、何れと見え、お世を、魚入れか
まむ、穿鼻、茶菓子、とす、り、所、あの人、豊太、岡、山、茶
軒か、石田三成の宛を、お世、を、傳、を、伝、つ、らう、茶

を修起しつゝし。其の戒を以て遂に日あり木を
その他の友人が豊に累仰り取つて好く命じられた
ありと云ふ

○天海僧正が將軍とて美生の方法を訓いた時
数ヶ條申上げた中一時放屁もてふ其の
一箇条があるのを一矢を信じたが、自合る女を
の一矢とするの相目かさめを起き、之んとする前
に二三着く四五放屁を連発するといふ事ある
自分のやうな好んか美酒を飲むといふ朝儀の
多くかすか酒つて之を一掃するといふ戒に爽
快を感ずる。放屁の修起は美生の法とおもふ
いか天海うゝといふ堂の之れを美生の一箇条とす

徳富

○一得するにあらざる。

○伊豆公が政室に撥らんとせん、別産四務と料
理し得ずと漸や覺悟を定め井上曰く是を
自から改むるを起し、多分徳義と云ふ、之れを
奉りて政府に主死こと、政史の海ありこと
あるか、徳令その徳あり、堂の美か集まる骨を
折り終つ、臨深あり、入堂せしめん、井上
伊豆交り説いた、臨深い第一の頭を、
この例上平き、辭つた代り、右の如き
先を、伊豆に、其の如き、
由つて如き、知る所である。

夫れ四家多難の際、南う、流時の方集

一として是を以て知れざる利産其是非を甲乙の
間を左右して決せざるは北より、竟に其時機を
失し、救正すべからざる陥んことを恐る、
故に今日の急務は目前改訂現出する所の
國家維持の方策を主明する者の各務に就
て、其一を急定するの必要を感じ、左の決
論に帰せられたるなり

海軍と伊泰と所見を測りしは結果
海軍は伊泰所執の政策を以て是を
とす、然んとも自己の境遇自から主動
とす、或いは之が為りて自身を犠牲に供す
ことを得ず、唯是を是認する以上、



内外に對し之を公言することを得ず
のみならず、他人に向つて語ることを得ず
と躊躇せしむ

明治廿一年六月十八日 海軍第一手記

他分甚しき書きやうなるが、海軍の動向を
を知らしむるに備へる入堂をなすは、
甲乙の泡を以て信つて此を以てす也

○日本は兎角輸入超過に困ることを、北のやうに
毎年の赤字を以て行機の子の外のいさゝか
か、せんが、いさゝか外匯から日本目ざして競合を
するに、日本から出かけるの無一、いさゝか一程の輸
入超過である、即ち海軍の四決実行場を以て

他のいづかの如くんが、亦分の外未だ行儀の款迎物
に思ひ違ふ。

の扱も一々夫のて居る者いじこもる或分を云返し等
等しく、思ひ違ふと云ふ事も致さ悲しむ、更の
大いす扱するも等しいといふ名言のあり

○今の内府の貴童園の皆徳川氏を引次きの回書
のあるかゝる品華の分給徳川代の回書史と稱する
はさしぬ。山崎氏を記ししといふかあるが
多官内府の界紙が一字に五枚枚改の元治坊
禊御者新目録といふ一冊を得た、いんじ山崎の記
録といふに別あるといふ、幕府の回書振替りか
記せんとある、自らいんじんといふ、幕府の回書
振替りか



歴代回書手続を大切つとて徳永の附せざる
つたことを知るを得た。家康駿府在城の時代のこ
といふ事しく考へてみるに、此頃の事と云ふは、
巻々んといふ、いんじん、家康其後義直頼宣頼
房の三卿と若干の古籍を合其つさんれか、他の布
世の昔に江戸の御文之庫に移さん、駿府の文庫に
の慶徳一、司籍の官者も移さん、置かんとする
永十年十二月にあり、所謂江戸文庫と云ふこと
いふは、此頃の事と云ふが、寛永七年六月に
此頃の御文之庫を御書院と改め、改築とあり、此
の所謂の御書院山文庫といふ、東邦文庫と稱す
ともいふ、恐らく此頃より前かた在つたことと

此。後、同正徳元年より一庫を造る。三年より又一
庫を造る。即ち前の西の瑞文庫の後のを新
文庫と稱したるに由る。此又庫の極細部
あり花を移す為なり。此よりいふ。
三庫を要する程の圖書の數は、いふに、
ついか、數り書いてあるが、ある時代に、修補を要する
圖書を納めて一冊、冊と記してあるを、
頗る花を移す所のつれやうに、あるに、
が一葉の圖書を、
これとを、
ことが、
當時の圖書の、



ついでに

- 一 古籍の、
木家より一部、
一部、
圖書の、
一、
一、

- 一 園者の出納に關しては、從今將軍のお手元
に廻つてあることゝも、或る期に幸ひ
油を賣ることゝも、ある方面に特にお
貸し出せる例もあつた
- 一 不用園者を賣下けに例もあつた、存在を
おのゝろるるものを焚き掃つたこと七十一并
ころゝあつた
- 一 他本から借入し、お物へ先か林家に
すへしとの御祝をせよ
- 一 暖房の油や、お火の油、お成りの日を
くゝゝ及ぶことの特典もあつた
- 一 林家の進献を、先づお大に願ふ



問訊して、お持を待たせよ、お
まうてゐる

- 一 日先、おお冬、おのゝり、お史を、お高と、お供奉
する、お例もあつた、お後、お地圖を、お
すゝゝ、お荒おとの、お直、お言、おあつた、お
ことゝあつた
- 一 偽撰と決し、お本、お数、お園、お日本、お後、お弘
お礼、お節、おを、お火、お中、お投、おす、おことゝあつ
た
- 一 御修、お月、お法、お令、お三、お四、お年、お一、お度、お暖、おを、おす、おべき
ことゝ、お特、お里、お去、お院、お暖、おを、お先、お中、おお
おす、お故、おす、おことゝあつた

一 圖書集成の考案特々木版を心つたこと
又へき

一 新御座と稱してその紅葉山の指陰の
退氣を多きうらうを行等しく遠く
中央の御座を換へり（今四の座と稱
するよりのこと）

一 去ゆに船載の支那圖書は林大等の
所して御座なるを無しを査たりせし
めを悔否を決つたこと

一 貴重圖書を特に卷子に装潢し例の
送利義の義ある墨然ある元槧後漢
書の如きこと



一 弘化元年本五火大上の時来焼火の圖書
十部補充のこと

一 毛利去官守献本道徳任の書終修後
の事

一 著書を開成所に移し医書を醫書
館に移し又昌平書院に多くの圖書を
移すこと

此の如く書き置きて又ておさるるに圖書は
ハあるに決して多くの圖書を死蔵し
つるを知らず印の圖書は如くは保
護してある苦心は長らくのあつたか
或る場を
校勘の面倒もやり、お時改に圖書は

事物のあらうにことゝのむのである。圖書の総數の七八萬
もあらうにことゝいふことが此處に依つて窺へらる。此頃回
才察心利しれ善を日探るる圖書の未歴か
控ぬ注さんてあるか此の書と併せを考へんか
得る不為し多そしのである。八月廿七日記

幕府文庫一の爲者正徳頃四萬冊ありしとある
後三萬五千六十増加ありしとありし諸君とあるは
献せあるべし。信濃毛利出守の進献をせ
たることありしとあるは二庫を造るゝある。尚
他の購入のものも多かといふ。長崎奉行の命
て支那の種々の圖書を購入ししもの多し
らう。支那各地の地理書も全部備へん

こと切に長崎の事ありし物も又くは圖書
書集の如き大部の出入りありしとあるは
正徳以後の圖書の増加を指すゝとあり
あり。随分選擇する力を入らうとありし
を焚く。陋本を書買ひ拂下げたりし
ことと見えてある。陋本といふは今あるものか
記載するものも此の印所謂の軟派の本
とありしは皆買ひ可らうとありしとありし
んにのむいあるものか。陋本を賣印の
の圖書を納ちし書櫃を作るの経費を充
つためとありしとありしとありしとありし
圖書の修理も可らうとありしとありしとありし

一萬八千冊の終補と云ふに記さるが如く、去書言
の進献、傳る道花江の正徳版と終補す
るたえん持二十一人の属吏入差を任し、此
るも七あり、禁裏へ圖書を献せしむ、場
合、いつ七特々、裝針、裝飾せしむ、此も
記せしむる。

徳川氏の進献、其他、物本の書、ふりあり、
初め、ゆへに、後、補充す、こと、定まらう、と
み、し、或、友、即、に、文、し、う、民間の書
買、し、買、上げ、し、も、し、て、の、缺、損、の、ま、し
、と、故、擲、し、去、ら、う、の、つ、れ、後、子、が、見、し、
本、と、進、言、終、補、は、洋、法、所、用、氏、所、其、他、個人



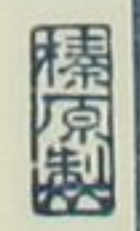
は、續、く、え、に、例、も、い、ろ、く、あ、る。進、言、彼、の、回、祿
の、出、入、四、倍、つ、て、お、傍、の、庶、物、類、も、五、七、倍、と、え
つ、し、す、と、ま、か、あ、る。後、進、言、の、貸、付、け、の、回、者、の
情、形、も、も、原、本、と、進、言、す、し、と、合、し、た、こ、
も、あ、る。

歴代古物奉行の外、互換回者、と稱する吏
僚の、あ、る、の、回、者、は、銀、家、あ、る、と、も、あ、る、と、貴、重
者、の、七、折、ひ、や、稀、覯、者、の、保、号、法、其、他、と、就
て、慶、長、の、中、行、と、進、言、し、ま、る、が、所、納、し、ん、と
み、る、。臨時の回者の惣記、現見物の編纂家、が
、此、の、つ、れ、と、あ、る、の、ま、り、折、り、賣、物、が、あ、る、。又、手
当、の、あ、る、つ、れ、と、の、記、せ、し、む、と、あ、る。

斯やうるまひて徳川氏に因方をおも重んじ
れんことが又く去、清く之を父祖の手記品と貴
重しと造るる死後し、壽命をいそぐしに
むい無の比
八月廿八日追記

○無聊に極くが漫ろに旅書と覽して好句を擇
取旦つ讀旦つ抄す、以て鋪尖忘日石の料の
夫の

一 秋和方松下納涼の詩云く
一 秋陰器守更水風三伏炎蒸物不却悔
我從來丹心松葉回為月所照松
一 涼影度水風如西、碎影搖空月



立松

一 山勢松聲遠、秋清泉氣香
一 睡美新茶熟、身閒野服輕
一 身安茶是穩、心定菜羹香
一 山翠平入、金箔右酒、松花滿枕試新
茶
一 壽世中無異味、鮮滋味家珍
一 竹送清涼月、松搖古谷風
一 心水平搖路、松影老樹林
一 夜深忘静、村路絕人行、林裡微風入
蕭蕭月如聲
一 朝糧不謀夕、何事欣我閒

一 嫩柳陰疎管火透 新秧葉短響身長
 一 陰深夕柳重螢生 夏夜暑淡午松陰
 未刻

一 飲食滋味秋如淡 行苑還似白雲輕
 一 年來傳信住山中 臥自向空深寂處 不
 世人倚世多 閒德只慣聽松風 徒倚
 一 杯賢與朽聖 與我萬年同
 一 臥閑夏涼轉而生 蕉窗畫勢抱幽
 一 雲逗蛙聲 歇急向 夕涼螢火怯微風
 一 雷因無雨成空怒 雲亦山人有懶容
 一 熱去於將潤 故認 蟬蟻恰若遠 恐人
 一 涼去漲 暑庭 深竹管一秋



一 蚊如真山人 蟻如偽君子 真偽雖異形均
 為口腹死

- 一 亂雲埋樹 驟雨壓峯 紙
- 一 平生最愁無官樂 裸體騎人六月天
- 一 林風移石 鳥鳴池面 定流
- 一 亂聲咽老石 日色冷空林

以上多く夏時の景象を叙するの詩必らずしも
 在句をみれば、由來夏詩に在るもの少しを
 詩人の口を替る、暑を憂へて涼とするもの致ある
 ことを記す

八月廿八日記

〇貝原遊軒と云ふ老人の伎多岐の縁故あり、指
 針を以て心入り大山の幅を畫し、来りて示す、畫

中洞の段あり樹木常洞峯悉皆可なり。余の爲り
席上指針意を此の余を以て感ずる。指針
を以て畫を此の人或いふと有り。然れども有り
る事と違ひ也。胸中より山あり。之れを畫するに
人に筆の毛筆指針を問ふ。但れ毛筆ハ靈
き杖柵を以て指し靈ある杖柵を、英る所
九。靈ある杖を藉るも靈ある杖を用わすの
便る。論る也。多々の國俗食を取らざるを
用わ。或る者、似るものと用わ、而して或る邦俗
一切若を用へず。指を以て食を取らざる言ふ所
を聴け。食柵ハ舌の味を以て味あへば、この味
らず。觸覚を以て味ハ、可らずと。此言也

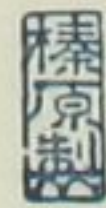
標原製

此理あり。指を以て筆とするハ、理甚れ相似
なり。一筆の靈感も、以て筆を感ずる畫
を此の本旨と云ふと云ふを得べし。余試之畫
者。此説を陳ぶ。画者亦然りと答ふ。八月廿九日
の風景と人物と同一からず。然れども其致と一
するもの無からず。其峯峻まするも唯れ山容ある
もの。又、中洞起り山の頂を遮り山の腰を
掩へ、一社の風致を生ず。人亦同じ。其時
之れも、指針、敢て非凡を感せず。但れ事起り變
る投ずんが、其初めを其人の凡るるを以て、支
那待へ早く此を道破す。宋の陸游の詩云
く

白塩赤甲天下雄、拔地突兀麻手共君宮、凜然
 猛士撫古劍、空有真氣健無雍容、不令氣象
 少滯滯、常恨天地無全功、今朝忍悟始歎
 息、如安元在何、而中大陰殺氣橫、慘澹
 元化變、總含空濛、山如長林思、時見平
 日乃與常、人同、安得朱樹育、方尺、看此疾
 雨吹橫、風

の舊政友、鹿吟秀磨、八秩頌健時、詩を能く
 七回友、頌の左の一詩、本身見、鳥羽、添く比
 する、今茲、ねめを存すと云ふ

八月廿日



烈女歌

東方日出國	日出照扶桑	(天照太神)
芙蓉自神秀	櫻花冠群芳	(弟橘姬)
和氣盈天地	四時調陰陽	(神功皇后)
萬世一系統	皇威益永昌	(伊企儺妻大葉子)
神祖曾立極	明德覃八荒	(上毛野形名妻)
投身激浪裏	一死代夫王	(宗像秋足妻安良賣)
敢問三韓罪	膺懲維武揚	(義朝第二女第三女)
爲俘心不屈	節義斯道彰	(泉三郎藤原忠衡妻)
鳴弦回敗勢	勇烈弱制強	(義經妻靜)
純孝達九重	賜田更豐穰	
兩姬死守節	婉婉姓名香	
擐甲開城出	大敵以身當	
繰絲歌一曲	舞榭駭虎狼	

戒兒何勤々	一語萬世光
丈夫辭內勅	剃髮入道場
黃金藏鏡底	一馬化龍驤
或仕仇家邸	氣銳心似槍
七首刺寵嬖	主家長重慶
降嫁孝貞德	和衷張大綱
將軍殉聖帝	從良追輓喪
悲絕又壯絕	凜乎如劍霜
名聲傳千古	特筆持綱常

辛未盛夏

斧正

(楠妣久の方)
(辨内侍)
(山内一豊妻)
(間十次郎妻さご子)
(飯田侯婢山口阿藤)
(和宮)
(乃木希典妻静子)

八十叟 鳴峽 鹿島 秀

未定稿 伏乞





江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

(上方)九月挿極標

竹 浦 老

主として丸派の餘類。貞柳歿後の上方の狂歌壇に一勢力として四方に根を張つてゐた此の丸派の連中は、既に頭目の玉雲齋を失つてゐたが、實は御大の國丸後の貞右のよみ筋のよみ詠み手が、尙幾干か残つてゐた。もとより江戸の盛況には及ぶべくもないが、それでも當夜參會の顔振を見ると

- 伊賀丸 岩成 梅止 榎季 吞舟齋
 - 加賀丸 數照 劉藻 蘭英 眞猿
 - 直蔭 蝦丸 橘庵 湖丈 廣庭
 - 菊酒屋 虎岳 守棟 寸美丸 季照
- (玉兎園)

等二十一名のつづ揃ひであつた。

此他、參會せずして句だけを持寄つたものが九名あつた。斯くて出来上つた狂歌集は半紙版二十九丁、中に色摺の繪

橘洲 等十七名

橘洲だけは不參にて文と歌とを寄せてゐるのであるが、之を見ると、當時一流の猛者ぞろひ。これでは氣の弱い化物なんかは到底出て來さうもあるまじく思はれた。

三

さて兩書をしらべてよく／＼見ると、江戸の夜狂は一枚の挿繪もなく、まことに寂しく出来て居るが詠み手は一流の達者ばかりで、歌に於て勝さり、上方の夜興は、詠み手は二流三流どころの人々ばかりであるけれども、觀る本として優れてゐる。殊に玉兎園澄丸の手に成れる會席之圖は當夜の模様を彷彿せしめ、また荒れ寺の光景を描いた圖の如きは、うす墨を使つただけであるが蒼鼠古瓦に竄るといつたぶきみな氣分があらはれてゐて、面白く見られる。化物の圖は主として虎岳といふ人の手に成つてゐる。

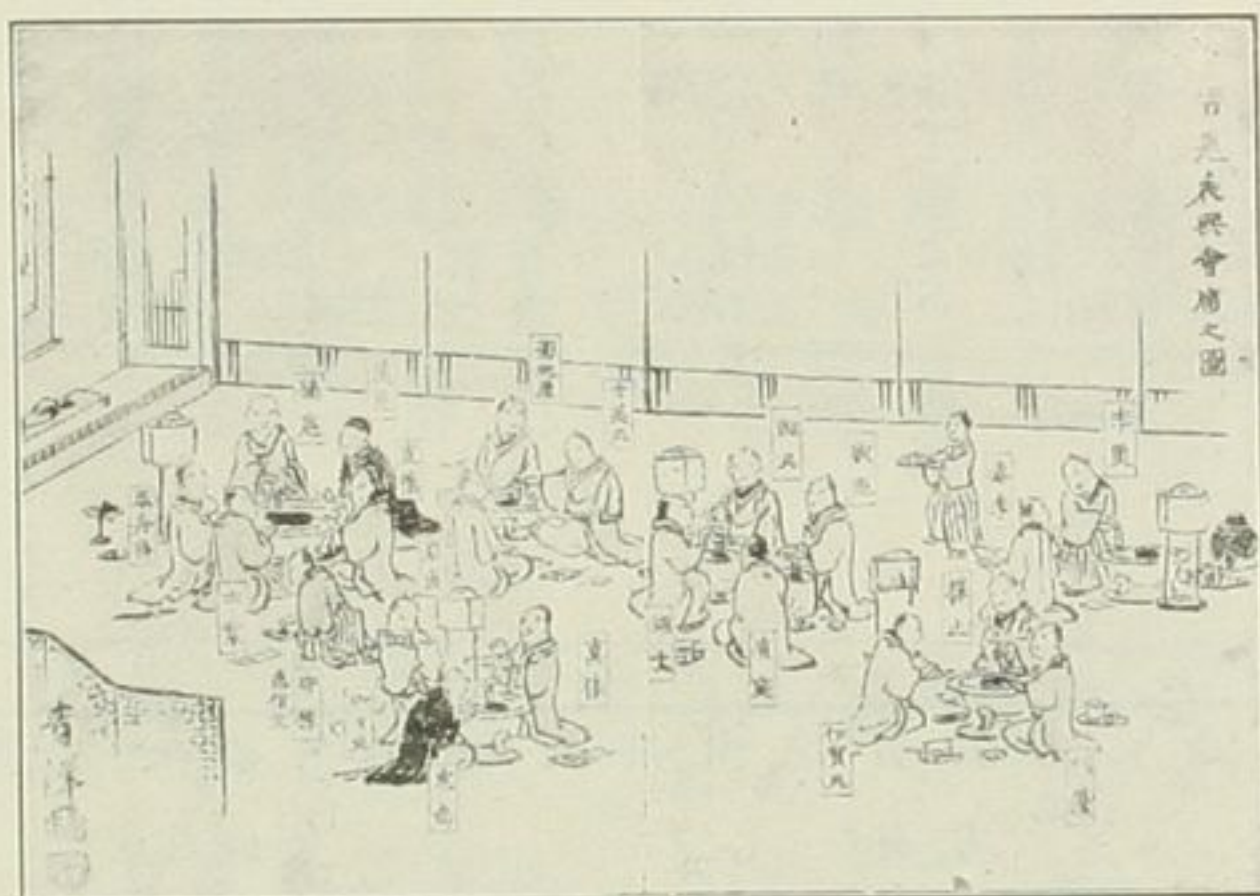
四一

四二

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

江戸の百鬼夜狂には頭領株の四方山人が第一に序文を寄せ、次に平秩東作が百物語の記をかき、又其次に葛唐丸が當夜の一伍一什を長文にかき綴り、跋は唐衣橘洲がうけたまはり、眞打の格にて「これが末に寄化物祝といふことをよめと、かの化もの、首領四方に名だかきだいたほちよりいひこしければ」として、見越の入道を題にして一首の歌を添え、筆を止めてゐる。當夜會同の顔振は

- 東作 定磨 參和
- 赤良 めし盛 京傳
- 算木 有政 光 金埒 今田
- 眞顔 搔安 酒船 高利 部屋住 裏住
- 劉主 唐丸



(圖之席會興夜鬼百)

た迷信は餘ほど消滅したといふもの、怪力亂神を語れた

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

右の歌さまむけにいやしきを覺ゆ、左ゆきの白きより、けしやうのものといひたる詠みくち、さすが老功なり可し爲し勝

四五

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興
るが、之はドレを見ても物凄く感じがなく、あまりに現代
ばなれがしてゐる寧ろ滑稽を覚えしめる。

四

而して眼目の歌はドウであるか。試みに兩書を對校して
みると、まづ數に於て、江戸のは東作の十一首を頭として
光と眞顔の各十首、定磨、参和の九首づつ。飯盛、搔安、
酒船の八首づつ。其他、有政の三首、金埒以下は二首または
一首づつにて、總計百一首。

上方のは、橋庵、吞舟齋の各六首を第一に、他は五首か
ら一首まで、平均して一名三首強となり前者に比し、頭數
が多いだけに一人あたりが減少してゐる。さて量よりも質
はドウであるか。それは言ふまでもなく江戸の夜狂は名手
ぞろひであり、上方の夜興と比べたなら段違ひの感はある
が、江戸のもの必ずしも全部が優れてゐるわけでもなく、
また上方のものが悉く劣つてゐるかと言へば決して然うで
はない。後者にも優秀な歌があり、前者に却つて平凡な作
品も少なくない。

先づ題目の撰定に就き兩書を對比するに
四二

雪女	参和	定磨	人首	赤良	飯盛	京傳	有政	部屋住	光長	金埒	山姥	逆井	古井	賞方	大雀	火車	生靈	死靈	四隅	元興	此返
女	女	女	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首
直蔭	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照	數照

赤良	京傳	眞顔	酒ふね	めし盛	定磨	搔安	参和	酒船	東作	光屋	定磨	参和	光屋	赤良	有政	飯盛	酒船	搔安	東作	金埒	山姥	ひ鳥	もどり橋
赤良	京傳	眞顔	酒ふね	めし盛	定磨	搔安	参和	酒船	東作	光屋	定磨	参和	光屋	赤良	有政	飯盛	酒船	搔安	東作	金埒	山姥	ひ鳥	もどり橋
吞舟齋	伊賀丸	士業	守むね	橋庵	眞惠美	橋庵	岩成	吞舟齋	眞計	湖丈	眞惠美	岩成	寸美磨	寸美磨	直蔭	直蔭	直蔭	直蔭	直蔭	直蔭	直蔭	直蔭	直蔭

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

古戰場	土蜘蛛	安達原	猫また	海坊主	ものけ	羅生門	化物やしき	うぶめ	なめめ	あやし	天狗	毛女郎	小袖ノ	魔生	殺生	鬼女	油車	片輪	天井	天井	船頭	壁座	大魔
古戰場	土蜘蛛	安達原	猫また	海坊主	ものけ	羅生門	化物やしき	うぶめ	なめめ	あやし	天狗	毛女郎	小袖ノ	魔生	殺生	鬼女	油車	片輪	天井	天井	船頭	壁座	大魔
季照	加賀丸	え比丸	士業	橋庵	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女	眞照女

右の歌さまむひにやしきを覺ゆ、左ゆきの白きより、けしやうのものと
いひたる詠みくち、さすが老功なり可し焉と勝

青	一寸法師	猪熊	死ね〜榎	だかれ小僧	蟹氣樓	見越入道	川入道	戸がくし山	雨降小僧	骸骨	大入道	札へがし	一ツ目小僧	三ツ目入道	金だま	高砂松	大座頭	文福茶釜	姥が火	むじな	をいてけ堀
京傳	かき安	光狐	さん屏	定齋	東作	東作	部屋住	同	めし盛	東作	ひかる	うら住	ひかる	京傳	へや住	酒ふね	ひかる	酒ふね	眞顔	京傳	東作
原	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火	火
季照	眞丸	巖松	数松	湖照	橋丈	寸美	岩成	蘭英	湖丈	眞季	梅丈	眞季	伊賀丸	廣庭	橋庵	眞惠美	吞舟齋	數照	季照	すみ纏	巖まる

上は題名、下は作者名	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず
同	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず
上	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず	八幡しらず

以上の如く兩書に取扱はれてゐる題目は、その大部分は同一であり、少數の類似と異同とがあり、而して全然題名の違つたものが十七八、兩書合せて三十七八に及んでゐる

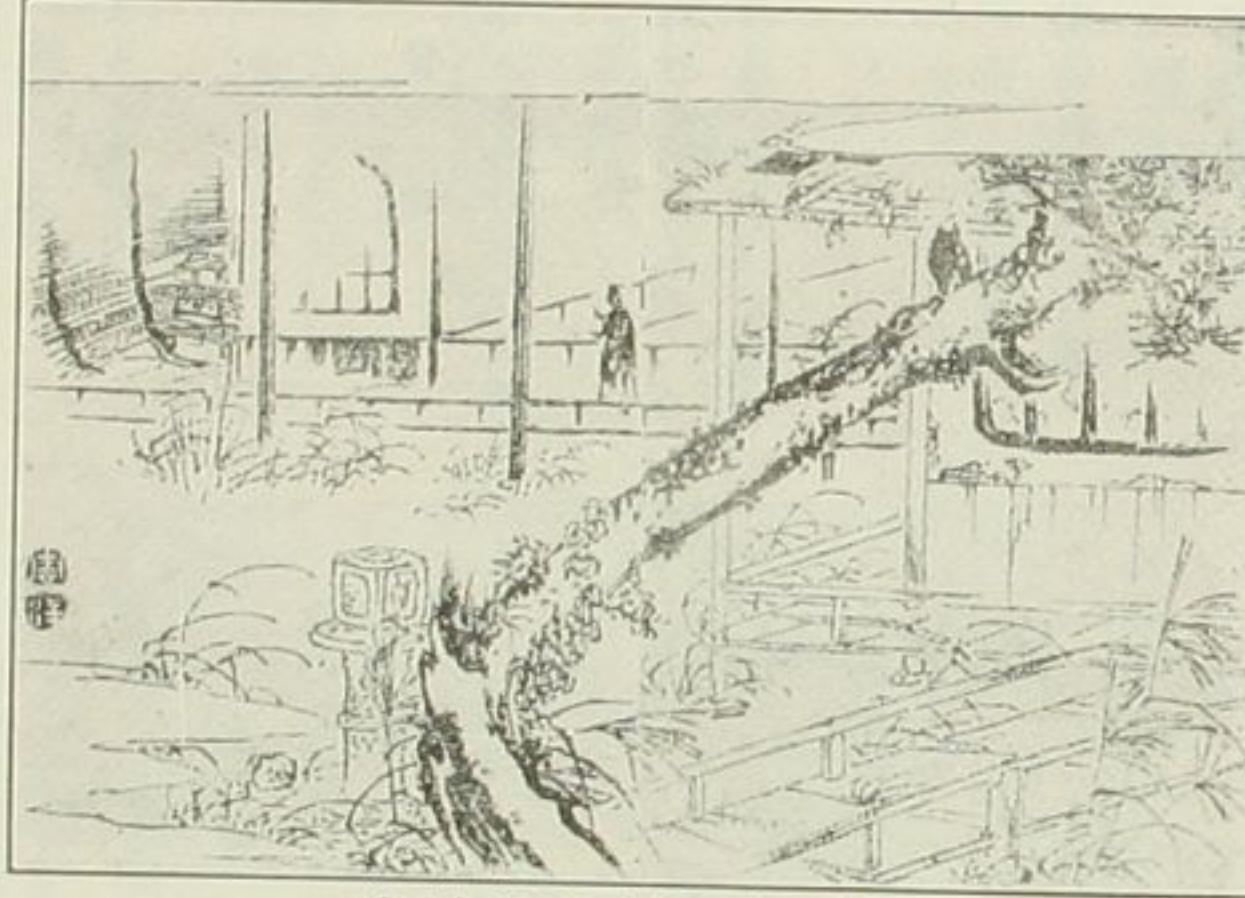
五

ことが分る。同時に是等の題目を通して、凡そ兩都に於ける俗間の迷信や、妖怪譚の行はれてゐた範圍や種別やが、ほど察せられ、しかも約半世紀も隔て、ゐながら取扱はれてゐる題目の相違した點が少なく、却つて共通した點の多かつた事などが明かになるのも、面白いと思ふ。

六

孔子は怪力亂神を語らずと愚衆に教えられてゐるが、また一方では、精氣物を爲し游魂變を爲すなど、も云はれ、眼に見えない或る力の存在を古くから認められてゐるのでいつの世にも怪談のたねは歇きないばかりか今尙、妖妄變化の奇異な傳説や、口碑が到處に残つて居り、恐ろしい物を見たがる常情と共に、鬼氣人を壓する底の巷談には殆んど耳を傾けるのが俗人弘通の心理状態である。世の中が開けて、バカ氣た迷信は餘ほど消滅したとはいふものゝ、怪力亂神を語れ

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興



(圖く行を下廊の寺れ荒)

ば歓迎せられ、不思議な現象が未解決のまま、傳へられてゐるのを見ると、コウした靈界の方面は今も昔もたいして變りがないものと見られる。

七

餘談は措き、最後に兩書から同題の歌を撰び出し、狂歌合の體裁にて作風の一斑を見るのも面白からうと思つて組合せを作つて見た。句毎に判の詞を添えたのは撰者のさかしら、故人の名吟を瀆すの罪は幾重にも御容赦あれと申置く。

右

雪女何はともあれゆき女こしより下は解けよと思ふ
右の歌さまむひにいやしきを覺ゆ、左ゆきの白きより、けしやうのものといひたる詠みくち、さすが老功なり可し爲し勝

四五

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

右 蘭 英

なきものとあけつらひ居しまのあたり見し其時のおそろしさいかに

左 左うたのこゝろめでたからず、右うたのこととは、のはず、勝負なしとする所以なり

轆轤首

左 眞 顔

窓の戸のすきと信せぬろくろ首ぬけ出るうそをたがつたへけん

右 士 業

名にめてしのびもちもろくろ首我は見るよりちむ斗ぞ

左 平凡、右も平凡ながらや、依り有興落し勝

一ツ目小僧

左 ひかる

雨ふりてふり出したる一ツ目の小僧はろくろ首のうら目敷

右 伊 賀 丸

宿からむとし火と見て立よれば野寺の門にひとつ目小僧

一ツ目とろくろ首と二者混合したるが微疵なり、それにひきくらべ、右の歌、昔のころはかなひ、なだらかに詠みさせた、いとめでたし、江戸の老手、顔色なしとやいはむ。

古戦場

左 京 傳

いせ武者の思ひか宇治の古戦場血煙たちてみゆるひをどし

右 季 照

たゝかひし跡にも年をふる案山子骨のみのこる霜の野さらし

左 さんわ

子とみせて石を抱するうぶ女こそたがめをかけしおもひものなる

右 寸 美 丸

宇ぶね鳥比翼の子をうみて色に迷ひのものとなりけむ

右 寸美丸ならぬはあらぬぞ、左うみを有つうぶめらしく、鬼氣人に迫るを覺ゆ、また石を抱かすおもひものも、よくき、たり

壁座頭

左 振 安

借銭は化物よりもおそろしき強催促の壁座頭かな

右 守 棟

壁に耳あり馬殿にはぬりこめに目のなき人をもちあられけん

龍 燈

左 赤 良

浅草のいほかあらぬか龍燈の影もすみだの川にぼんぼり

右 寸 美 丸

よる浪の花かあらぬか磯なれ松に火をともしよと見するあやし

右 寸美丸ならぬはあらぬぞ、さすがに江戸随一の蜀山先生には

もどり橋

左 東 作

たほやかな柳のうらのいつときぬばかさるゝとも立もどり橋

右 ひろ庭

江戸の百鬼夜狂と上方の百鬼夜興

左 ことほつかひ巧みなるに傾たれど

天井の手

左 まがほ

三浦屋の格天井と名にたかくとんだ手を出すこはいけいせい

右 墨 繩

天井にすまひをすなる變化とて關とりの手の如き大うて

右 右住ひを角力ひにかけて關とりの手と縁語をつかひし作意、奇なるにはあらぬぞ、左のむけに露骨なるには優されり

髪 切

在 持 さかふね

ゑりもとにぞつと夜風の雪隠はこはいと手からおとしかみ切

右 かるも

はれやらぬ執着なれや世の人のかみをすつはり霧ふかき夜は

古 椿

左 定 磨

風ふけばをのれと首をふる椿はさへまたらにみへておそろし

右 湖 丈

並ひにしはもおそろしや年をふる椿のはなのさけるくちひる

双方とも、おそろし／＼とて念置なき作りまなれど、風に首をふる椿といふより、はなのさけたるくちびるといひ、はなをそえたる手ぎわをとりて勝とせん

うぶ女

辻君と又もばけしかもとり橋夜ことに客の腕をとりしは

夜毎に辻に立つ魔性の惣縁は腕ごころか家々のむ化物なり、左の平凡なるよりおかしけれは勝となす

木 た ま

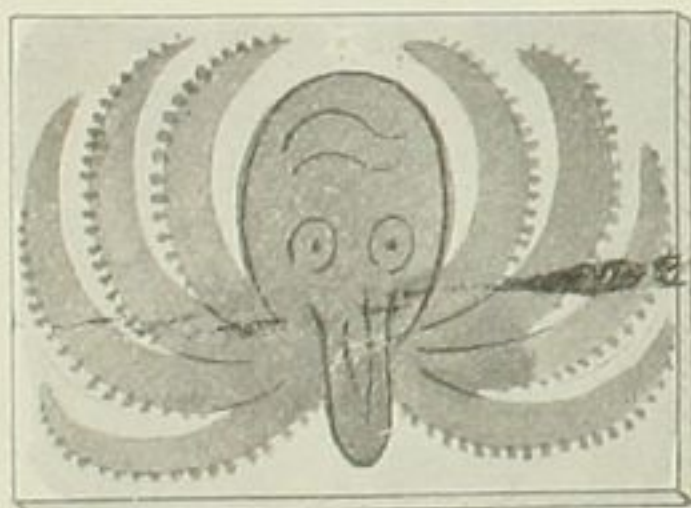
左 めし盛

山々はみな落葉するその中にこたまの聲はまだかれもせず

右 直 蔭

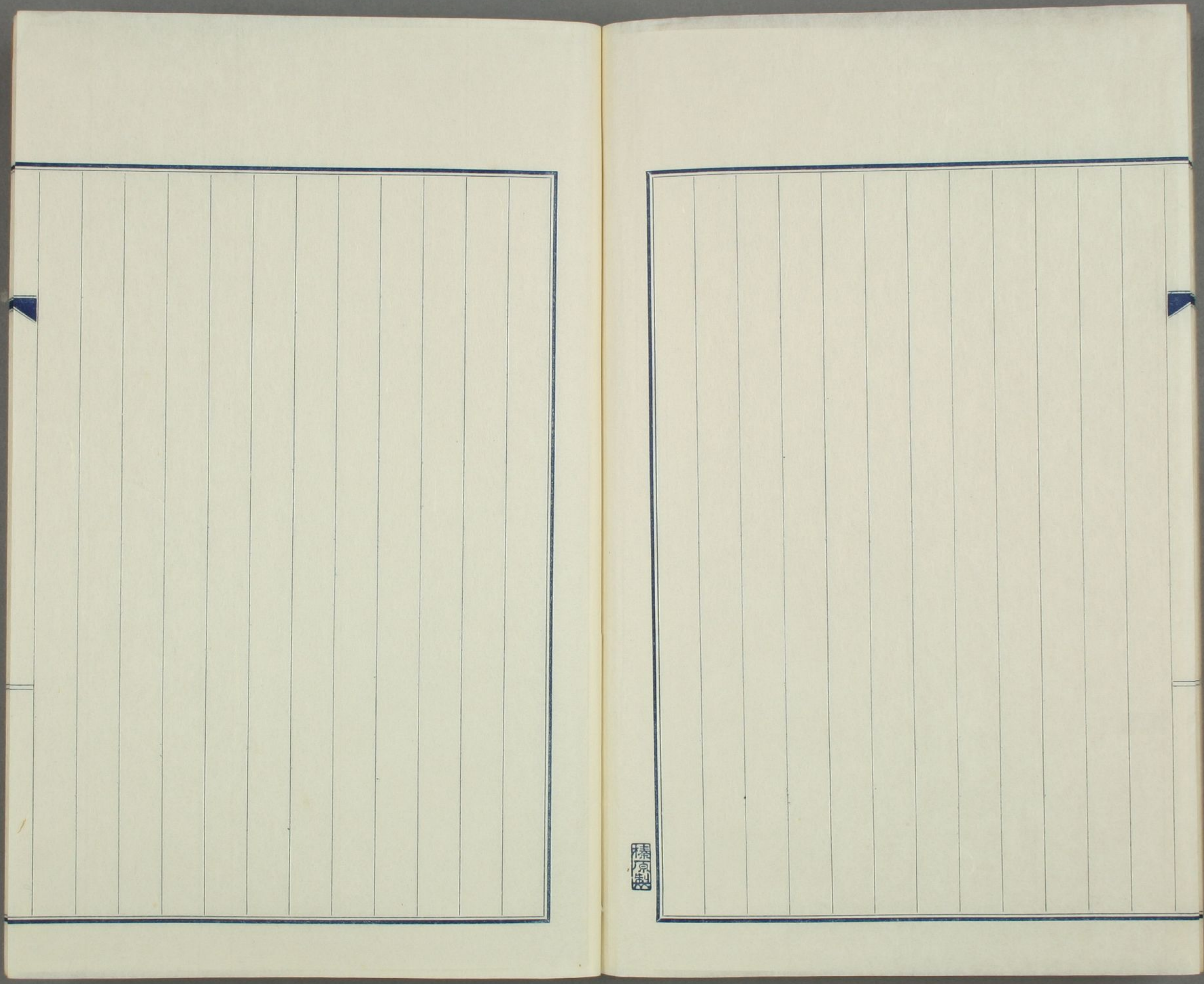
こたへし／＼ものゝ姿をみやま路に見なはこたまの魂やけぬらむ

落木の中に木たまのこゑのみ枯れずといへる作意おもしろし、右の見えぬものを見なほといへる無理な假想にてうけがたく思はる。左を勝となす所以



大阪繪馬集 (十八) 俗信

大阪府下岸和田市南町天性寺の館地蔵へ諸願の普奉納す、此地蔵尊は建武年中、一體の地藏尊が鮫の背に御し給ひ海中より出現されしものにて、城主和田氏奇異のことに思ひ城内に祀られしものなりと云ふ、此圖以外に書き方の異りたるもの、又は鮫の背に乗れる地藏尊などの大型繪馬等多く奉納せり。(人魚洞)



標原製



爲恭筆三嬌圖 (部分)

東郷元帥の雄筆

本誌日々 本社募集歌の全文

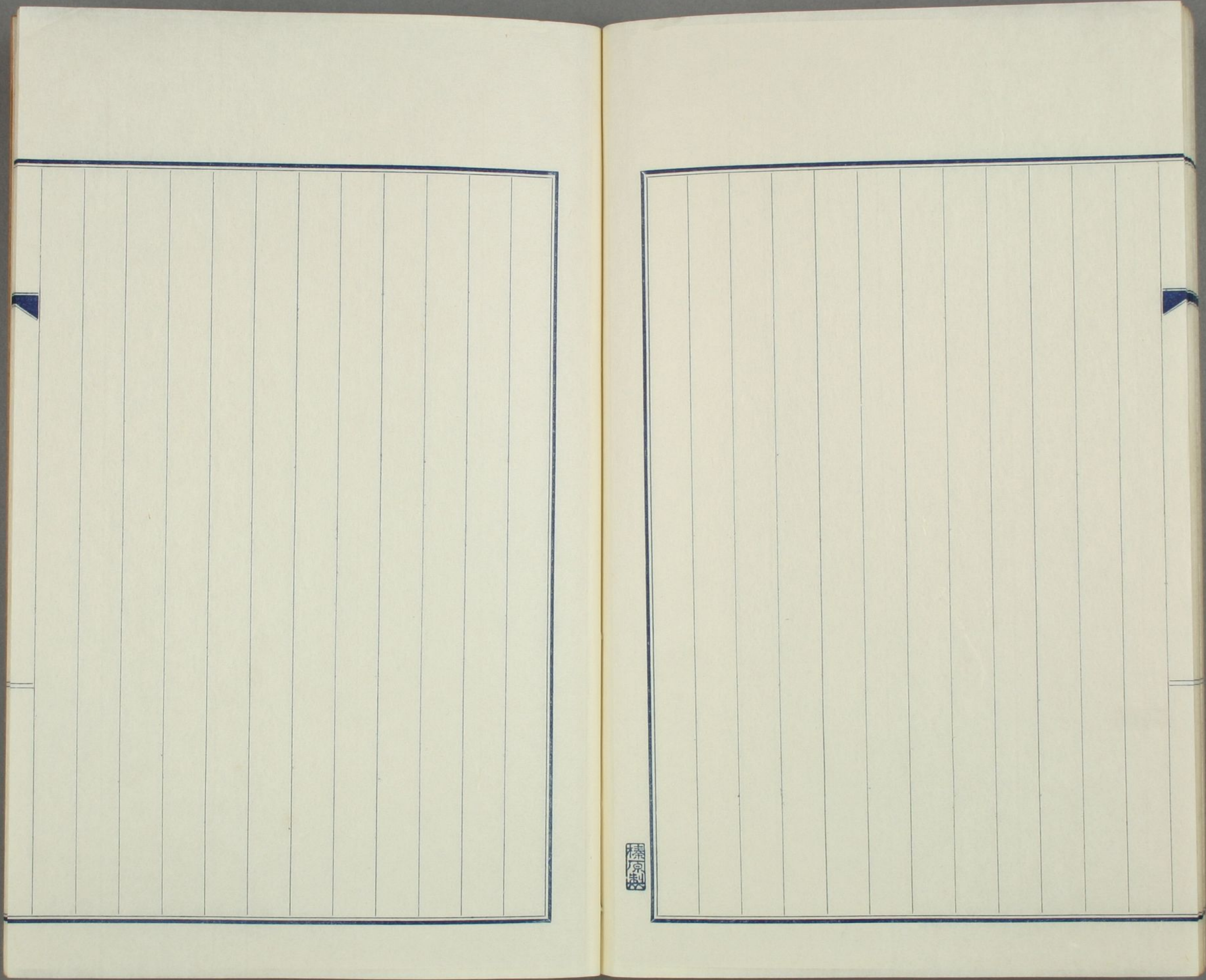
國難 日本國民歌
突破

一 吼えろ嵐 来ハ 精疑
 恐れし我等 許さ 我等
 見よ 天皇の 見よ 極東の
 燦々 衝鋒隊 確たる 平和
 遮る雲 亜細亞士
 断して徹り 断して守り

二 狂へ 怒濤 擧げ 日本
 少かき我等 いさぎ 我等
 見よ 磐石の 見よ 國威
 嚴なる 祖國 凜たる 若節
 太平洋 正義に 今
 断して安し 断して立り

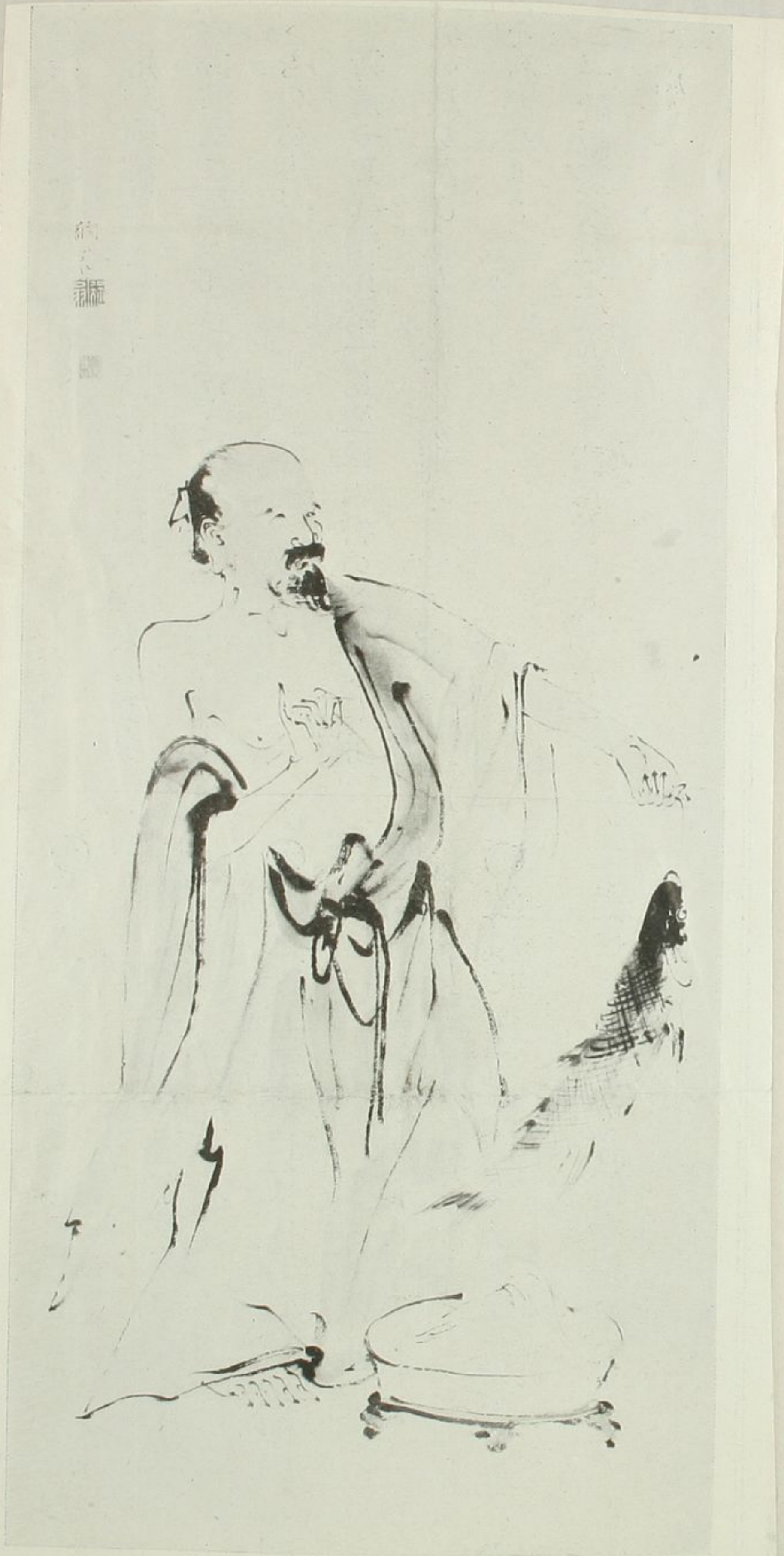
伯耆守 伯耆守 伯耆守

本社募集の「日本國民歌」はさきに荒木陸相の題字を付け希望者に配布してゐるが、文部省では同歌を検定認可すると共にわれらの東郷元帥に「日本國民歌」全文の書を依頼して國民精神振興のため種々の機會に利用することにしたが、最近見事に出来上つた



紅印

以下
4丁
白紙



納言筆

(寫縮) 圖慈左 筆言納

榛原製

